キョンの非日常

囲村　数機

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
キョンの非日常

【Ｎコード】
Ｎ２２８６Ｗ

【作者名】
囲村　数機

【あらすじ】

ある朝、俺のベッドに女の子がいた。嘘？
俺はヘンテコなキョンというあだ名をつけられているが、
このポニーテールの女の子もキョンと名乗る。
これはおかしくなってきた。ハルヒ的非常識パワーの影響なのか、
それとも・・・。

プロローグ　六月の微妙な温度となんてことのない普遍的な俺の部屋（前書き）

「涼宮ハルヒ」シリーズの二次創作です。
キョン子（女体化キョン）など、性転換キャラが出てきます。
それが嫌な方は見ないほうがよろしいのかと。
また色々と創作するので、原作を汚されたくないと思っている方も戻られたほうがよろしいのかと思います。
でも涼宮ハルヒが好きな人や、キョン子ＯＫな人はぜひどうぞ！

プロローグ　六月の微妙な温度となんてことのない普遍的な俺の部屋

キョンの非日常

何の鳥か知らんが、とにかく鳥類では間違いない動物のさえずりが聞こえる。
俺はカーテンの隙間から差し込む偉大な太陽光によって目を覚ました。

「・・・・」

何故だかベッドの脇に落ちている目覚まし時計を見やると、もうそろそろ平日の朝としては、そして平日の朝には学校に行かねばならない学生の身である俺にとしては、もう起きねばならない時刻であった。

「あーあ・・・・」

特に意味のないつぶやき。

昨日は何時に寝たか思い出せない。
・・・・とても眠いというほどではなかったが、やはり眠いもんは眠い。

仕方ないと俺は半身起き上がり、大きく伸びをした。

そして、何気なくベッドの左を見た。

毛布に何かがくるまっている。どうせ猫のシャミセンだろう。

シャミセンにしてはそのシルエットは大きいような気がしたが。

俺は眠い目をこすりながら、毛布をはぐった。

そこには小柄な女の子がすやすやと眠っていた。

「・・・・あれ」

女の子は毛布をはぐられて安眠妨害を訴えるかのように首を横に振り。

目を覚ました。

ぼんやりとあくびをし、その女の子は何気なく右を見た。

右ってことは、つまり俺を見たわけで。

眠そうな目が、だんだん大きく見開かれる。いや、ちょっとまて。

「キョーンくーん、朝だよぉー」

母親の命を忠実に実行すべく、妹がばたっと俺の部屋のドアを開けた。

それと同時に、

俺とその女の子は一斉に悲鳴を上げた。

プロローグ　六月の微妙な温度となんてことのない普遍的な俺の部屋（後書き）

勢いに任せて書いているので、誤字脱字、文脈がおかしい、などありましたらどうぞ気軽に教えてください。
また質問などもどうぞ。

一話　キョンとキョン

おいおいおい。いやいやいや。

俺は驚いたついでに、ベッドから転げ落ちてしまった。

「うおおおっ！？っと！？」

女の子はジト目で俺を眺めた。女の子が言う。

「・・・・えーっと・・・悪いけど・・・あんたは・・誰かな？」

いや、それは俺のセリフだから。ほんと。

「いや、私のセリフだから」

「いやいや、俺のセリフだから」

「いやいやいや・・・「ねえっ！キョン君たち！なにやってんの！」

俺と女の子の会話を見かねて妹が叫んだ。

女の子はまじまじと妹を見つめ、言った。

「おい・・・髪、急に伸びたんじゃないか？・・・というか、結んでたか？・・・というか、それじゃまるで妹じゃないか・・・？」

というか。

「なあ、妹よ・・・こいつを見て何も思わないのか？」

「何言ってるのーキョン君、昨日から家にいるでしょー。おかーさんが言ってたでしょー、遠い親戚のー」

遠い、親戚。か。女の子は目を白黒させている。

やっと頭が働いてきた気がする。

「ねー、キョン子ちゃん！」

「キョン子ちゃん！？」

俺が叫ぶと、女の子は面倒くさそうに寝癖の付いた頭をかいた。

「まあ・・・そう呼ばれているけど・・・・だからあんたは誰だ」

「俺？俺は・・・「キョン君だよーキョン子ちゃんと、キョン君―！」

妹は何がうれしいのか満面の笑みを浮かべて、言った。

ふん、ようやく事態がつかめてきた。

「おい妹よ、とりあえず俺はこいつと話があるんだ。ちょっと出て行ってくれ」

えーひどいーとかなんとかいろいろ言ったが、俺は妹をぐいぐい外に押しやった。

そしてキョン子と呼ばれた女の子に向き直る。女の子は床に置かれた大きなボストンバックを開いていた。

「これ・・・わたしの・・・？・・・全部ある・・・」

「それはお前の荷物みたいだな、どうやら」

「でも・・・・なんで？」

「とりあえず昨日の記憶はあるか」

「昨日は普通に日曜日だったから・・・普通に日曜を過ごして・・・寝た」

「んで、起きたら俺の部屋にいたってか」

「いや、ここわたしの部屋」

やつは言い張った。なんだかどうも話がつかめてきたぞ。

「分かった、きっとまたハルヒだ」

「ハルヒ？って？ひょっとして涼宮ハルヒコのこと？」

「だれだそいつは・・・」

俺の頭にひらめくものがあった。

「・・・とりあえず学校に行くぞ。お前、制服は・・・」

俺のブレザーがかかっているフックに、さらにセーラー服がかかっていた。

「・・・あるみたいだな、やれやれ・・・」

二話　異世界人の動揺

とりあえず、解決せねばならない課題は山積みで、しかも何一つ解決していなかったが、なにはともあれ俺たちは学校へ行った。

俺たちは、二人横に並んで北高までの道のりを歩いた

「・・・どうやら、お前は異世界に飛ばされたみたいだな」

「はあっ？・・・はあ・・・」

キョン子は長い髪をストレートにたらしていたが、いつもはポニーテールに縛っているのだという。なんてことだ、ぜひ一度見てみたい。いやいや、そうじゃなくて。

「それで、お前の世界じゃこっちの世界と性別が逆転している・・・どうだ」

「・・・まじで？・・・いや、ちょっと待て・・・あれ・・・？」

キョン子は顔をしかめて考え出す。

「・・・わたしには弟が、いる」

先程の妹を見た時の不可思議な言動はそのためだったのか。

「こっちじゃ妹だ」

「さっきの涼宮ハルヒって言うのは・・・逆転した涼宮ハルヒコのこと？」

「さあ・・・お前の世界じゃハルヒはハルヒコなのか・・・」

それもまたすごい気がする。見てみたいのか、見て見たくないのか・・・。

北高名物、上り坂に到達した。周りには北高生はいない。俺たちは普通に遅刻だった。まあ朝のやり取りが響いたみたいだ。

「なら、わたしはもしかして・・・」

「俺の逆転、だと思うぜ」

「・・・・・・」

なんだその不服そうな目つきは。おい。

なんと玄関で生徒指導の先生が待ち受けているとは。キョン子はその先生に引っ張られていった。

「まったく、転校初日に遅刻なんて・・・まったく・・・」

「ち、ちょっと待って・・・」

なるほど、そういう設定になってるのか。転校生ね。

「まあ、どのみちハルヒがほっとくわけないってか」

俺はつぶやきながら、階段を上り始めた。遅刻の言い訳を考えながら。

「・・・・から来ました、・・・・です。よろしくお願いします」

どことなくだるそうな顔で、キョン子は俺のクラスで自己紹介した。ぱらぱらと拍手が起こる。

「ねえ、キョン。あんたの親戚なんだって？面白そうじゃない」

一体何が面白いのか気になるところだ。いや、教えてもらわなくてもいい。ほんとに。

涼宮ハルヒは相も変わらず俺の後ろの席でふんぞり返っていた。

「なんだよ、まさか・・・」

ハルヒは特大スマイルを浮かべた。

「もっちろん！ＳＯＳ団に入団してもらうわっ！転校生だしっ！」

あいつの話じゃもう入部していてもおかしくないがな。俺はただただ、はやく昼休みが来ないかとそればかり気にしていた。

キョン子は、なんとたまたま空いていた俺の隣の席に座った。

「ねえっ！あんたＳＯＳ団に入部しなさい！」

勧誘ではなく命令なのがハルヒのハルヒたる所以だった。

「？」

キョン子の目は、こいつは誰だと訴えている。

「ああ、涼宮ハルヒだ。さっき言ったろ」

「あたしはＳＯＳ団の団長よ！団長直々に言ってんだから、もちろん入部するわよね」

何を根拠に言っているのか、本当に疑問だ。

キョン子の目は空中をさまよい、何度かハルヒと俺を見ると、力無くため息をついた。

俺は気づいちまった・・・あいつのため息のタイミングや長さ、全て俺にそっくりだったということを。

三話　男女逆転

授業が全く頭に入らないまま、昼休みになった。よし。決起の時だ。

「おい」

俺はキョン子の腕をつかんで素早く教室を飛び出した。ハルヒは食堂に行くべくそれより早く飛び出したのだが。

「ちょ、どこ行くんだよ！」

「お前も知ってるだろ？長門や古泉とか！」

「・・この世界にもやっぱりいるんだ」

一年九組の扉をがらりとあけると、流石に目の前に古泉の気の抜けた笑顔が現れるとは思っていなかった。

「おや、僕もちょうどあなたに会いたい気がしていたのですよ」

「古泉、話がある。早く部室に来い」

「お、お前が古泉か・・・確かに古泉ならイケメンでもおかしくないな」

キョン子がうんうんとうなずく。古泉は分かってるのか分かってないのかよく分からない顔をした。まあ、結局分かってないんだろうな、何も。

「・・・分かりましたが、そちらのお嬢さんはどちらです・・？」

「お前にお嬢さんとか言われたくねえっ！」

つい俺は自分が言われたかのように返事をしてしまった。

予想通り、部室には本を読んでいる長門がいた。

「・・・・来ると思った」

なら来てくれよ。

キョン子が俺の制服の袖をつかんで、言った。

「ねえ、ひょっとしたらこれが・・・長門？」

「ああそうだよ、長門だ」

俺はできれば朝比奈さんもいてほしかったが、まあ二人がそろえばいい。二人に事情を全て説明した。

「・・・なるほど・・・ならばこのお嬢さんはキョン子さんとお呼びしなければ」

それは真っ先に言うことなのかどうなのか、甚だ疑問だ。

「質問だ、やっぱりこれもハルヒがしでかしたことか」

「・・・・・そう」

「一体全体奴は何を願ったんだ？何か不満があったのか？」

「さあ、気づいているとしたらそれはあなたなのではないかと思っていたのですが。どうやら違ったようですね」

古泉は困ったような顔をして、笑った。

「なに？」

そう言いつつ、俺の脳裏にある光景がフラッシュバックしてきた。

先週の金曜日の放課後だ・・・・・・

「おい、キョン、俺んちにすっげーおもしれ―ゲームあんだけどよ・・・・・・ってかまあ誘う前からわかってたけどな。今日もどうせ涼宮と部活なんだろ？」

俺のアホ友、谷口が俺に話しかけてきた。俺はなにより背中に突き刺さる冷ややかな視線に耐えきれそうになかったので、うなずいた。

谷口は大げさにため息をついた。

「・・・はあ、お前もとうとう涼宮の美貌の虜になっちまったみたいだな、この面食い」

「はあっ？いや、ちょっと待て俺がいつ面食いになりましたか！」

「ならお前、涼宮がもし男だったらそれでもその怪しげな部活して

たかよ！？」

「ハルヒが男だったらとか考えたこともないわ！そしてきっとたとえ俺が女だったとしてもあいつはきっと俺を誘ったに違いない！俺のこの背筋の寒気がそういっている！」

ばっと俺が後ろを振り返ると、ハルヒはなにやらじいーっと考え込んでいた。

また良からぬことを思いつかなければいいが、と俺は思った。

・・・・・って思ってたんだった！すっかり忘れてたぜ、そんなこと。

「その時に涼宮さんが女のあなたを見てみたいと思っていたとは考えられませんか？」

なんてこった。恐る恐るもう一人の俺の顔をうかがうと、俺をジト目でにらみつけていた。

「おい、お前のせいじゃないか！こっちはどんなに迷惑か！」

「いや、本当にすまん、もう謝るしかないぜ、本当すまん」

キョン子はぶつぶつと文句を言い続けている。

「まったく、とんだ目にあったよ。ベッドには男版のわたしがいるし、弟は妹になってるし、古泉は男になってなんか気持ち悪いし」

古泉は苦笑するしかないじゃん？みたいな感じで苦笑していた。

「失礼ですが、あちらの世界では僕はどのような存在なのでしょう？」

キョン子は顔を上げ、そしてためいきをついた。

「・・・めっちゃ美人。巨乳だし。性格もいいし。んで閉鎖空間でばんばん戦える」

「それは・・・嬉しいですね」

おい、なんだその妄想顔は。

ふと気になって、俺は尋ねた。

「なあ、ハルヒと長門はどうなんだよ」

「長門はあんまり変わんない。隅っこで本読んでる宇宙人」

「あ、そう、ハルヒはどうなんだ？」

「ハルヒ？あんたの後ろにいたのが涼宮ハルヒ？こっちじゃ涼宮ハルヒコ。いっつもバカ考えてるバカ」

「・・パラレルワールドでは本質的なものは何も変わらない」

長門がぼそっと口をはさむ。

「・・・わたし考えたんだけど、こっちの世界ではわたしは異世界人ということになるんだろうか？」

「そういうことじゃないですかね。涼宮さんは我々だけでは飽き足らず、とうとう異世界人も手に入れてしまったようですね」

・・・・やれやれ、だ。それしか言いようがないだろ？

四話　ＳＯＳ団

放課後になった。ハルヒは電光石火の素早さでキョン子の腕をひっつかんで我がＳＯＳ団アジトと化している文芸部部室に連れて行こうとしていた。キョン子と、俺なりに考えたこの騒動の話をしようと思っていた俺は、慌てて奴を引き留めた。数メートルは引きずられたがね。

「なによ」

「いや、ちょっとこいつと話があってな」

「そんなの部室でもいいじゃない」

「いや、部室じゃダメなんだ」

ハルヒは怪しげに眼を光らせた。怖いくらいの笑みだ。しまったあああっ！

「へーえ、他の人に聞かれちゃまずい話をするわけねえ・・・・」

「いや、それでもやっぱりどうでもいいような気がしてきた、うん」

しかしキョン子が口を挟む。

「なに？わたしは気になるんだけど」

うわああっ！お前は俺なんだからそこらへん分かっておいてほしかったっ！

「いや、ほんとにいいからさ、行くぞハルヒ！早く部室へ！」

怪しげに微笑むハルヒをぐいぐい外まで連れ出し、俺は部室に直行した。

ハルヒはしばしの間アヒル口だったが、それもすぐになくなった。

部室にはＳＯＳ団団員がすべてそろっていた。中身空っぽのスマイルを浮かべる古泉、メイド服でいそいそと茶の用意をする朝比奈さん、それに分厚いハードカバーを読みふける長門だ。

「みんなっ！新入部員を紹介するわっ！キョン子ちゃんよっ！」

キョン子はあいさつしながら部員の顔を改めてじっくり眺めている。ここでも朝比奈先輩はメイドなのかとかつぶやきが聞こえる。

そうか、考えてみりゃ俺たちと全部性別逆転してるんだよな、こいつがいた世界は。朝比奈さんは男でも愛くるしさはかわらなさそうだ。うん。

反応はまちまちだった。唯一ひとり昼休みには会えなかった朝比奈さんだけが驚いた顔をしていた。まあ古泉も大げさにリアクションをとっていたが。

「と、いうわけで、新入部員の歓迎レクリエーションということで、

市内のバスケットボールの大会に出場するわっ！」

俺は唖然とし、古泉の顔を見た。奴は気障な感じで肩をすくめて見せた。なんなんだ、それは。

朝比奈さんはカセットコンロにかけたやかんがぐつぐつなっているのにも気づかず、口を半開きにして驚きを表現していた。ほんと、朝比奈さんはなにをしていてもかわいい。反則だ。

長門は先程と同様に無反応かと思いきや、意外にも顔を上げてハルヒの顔を注視した。驚きだ。

「なんだって？」

唯一口を開いたのはキョン子だった。

ハルヒはどこまでも笑顔で続ける。

「だから、バスケの大会よ。市民体育館があるでしょ、そこでちょっとした大会があるってチラシが貼ってあったわ。やぶいてきた」

破いてきた？まあいい、そのチラシを見ると確かに市内で行われるバスケットボール大会についてのものだった。部活の大会とはまた違うようで、クラブチームや寄せ集めで作ったチームでも参加できるらしい。

面白いものが大好きなハルヒの格好の餌食だ、こりゃ。しかしこんなチラシどこで見つけたんだ。

古泉が近寄ってくる。

「いいんじゃないですか、ちょうどここ最近は六月にしては天気もいいですし気持ちもいいですしね」

体育館でやるスポーツに天気は関係ないだろ。

「なあ、それは決定事項な「もちろん決定事項よっ！団員は団長に従いなさい！」

ここで俺はふと違和感を覚えた。なにかおかしい気がする。いや、なにがおかしいと言われても困るが・・・・なんというのか、そう、デジャブ？

いやいやそんなことはない、と俺は考えを打ち消す。そんなはずがあってたまるか。ＳＯＳ団でバスケの大会など未経験だ。・・・・大会？

俺がなんかこう、もやもやと考えているうちに、ハルヒは

「じゃっ！あたしは体育館使えるかどうか見てくるから！」

「体育館ってお前「そりゃあ勝つための練習は必要よ！学校が無理なら市営の体育館でも何でもあるでしょ！みんな、体育服に着替えておきなさい！」

ハルヒは嵐のように去っていった。

古泉がチラシを手に取る。

「・・・場所、市民体育館・・・今週の土曜日ですか。まいりまし

たね」

ちっともまいってないような顔で言うな。

俺はこの時、迫りくる練習という名の地獄のことで頭がいっぱいになっており、まだ何も気づいちゃいなかった。

・・・長門はもう気づいてたのかもな。

五話　ブレイクタイム

「さて」

その日の夜だった。俺とキョン子はもちろん家に帰っていた。そして、主に妹からキョン子の設定を聞き出した。

「これまでの話をいろいろまとめると」

キョン子はこちらの世界と男女逆転の世界から涼宮ハルヒの力によって呼び出された。

キョン子は俺(キョン)の逆転の存在であり、こちらの世界では俺(キョン)の親戚で、今までずっと外国にいた。が、この春に日本に帰ってくることになり、北高に編入することになった。

「・・・・両親はともに記者で、世界中を飛び回っている・・・・ということになっているらしいな」

キョン子は頭をかいた。

「なんてこった、わたしの両親がそんなことになってるとは」

「わたしの両親ってことはつまり俺の両親だよな」

「そんでわたしも帰国子女っていうことだよね、どうしよう。英語なんてしゃべれないよ」

「しゃべれないのか」

「キョン並には」

「なら無理か」

俺は英語が取り立てて得意だということはない。つまりはキョン子もだ。

「それより俺のことをキョンと呼ぶのはやめろ。お前もキョンだろ」

「でもキョンもキョンだし」

「なら俺だってキョン子と呼んでやるさ」

「なに！それは嫌だな」

「・・・・だけどよ、ハルヒは俺のことをキョンと呼ぶし、お前のことをキョン子と呼んでるだろ？なら俺たちもそれに倣わないといけないのかもとは思わないか？」

キョン子は顔をしかめた。俺も多分しかめているに違いない。

涼宮ハルヒが起こすどんな無茶苦茶な事柄でも、人は「仕方ない」とあきらめる他手立てがないのだ。

「・・・・つかぬ事を聞くが、やはり全員逆転してるんだよな？」

「え？うん、まあ大抵そうだった。国木田も谷口もあんな男になってるとは」

あ、やっぱりあいつらも女なのか。

「国木田は結構可愛い部類に入ると思うけど」

キョン子は言った。

「うーん、分かる気がする」

「谷口は男ばっか追いかけてる」

「は、そりゃ傑作だ。こっちの谷口も女が大好きだ」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

「おい、さっきも言ったけどここはわたしの部屋だ」

「そっちの世界じゃそうだったかもしんないけどな、こっちの世界じゃそうはいかねー。なにしろ俺が健在だからな」

「くそ・・・・じゃあなに、か弱い乙女に廊下で寝ろとでも？」

「俺はお前を女と認めてやってもいいが乙女とは認めねー」

「こっちだって御免だ」

「なら言うなよ。妹の部屋で寝ればいいだろ」

「・・・そんなのまるで弟の部屋に侵入するようなもんなんだよ、

わたしにとっては！」

結局、いろいろすったもんだあったが、キョン子は俺の部屋に住むことになった。ベッドは一日ずつ交代で使うこととなり、ベッドが使えないやつは床に布団を敷いて寝るということになった。

「文句ねーな」

「机はどうするんだよ」

「勉強すんのか？」

「キョンは？」

「するかよ」

「ならわたしもしないと思わない？」

「それもそうか」

なんだか非常にやりにくい。

とりあえずキョン子がじゃんけんに勝って、ベッドに飛び乗った。俺は泣く泣く布団を敷くことにする。

「ねえ、長門か古泉か、元の世界に戻る方法知ってる人いなかった？」

キョン子が俺を見上げて言った。俺は押入れから布団を一式出しながら答える。

「いたらとっくに教えてもらってる。電気消すぞ」

「うん・・・・処置なしかぁ・・・・」

暗闇の中、キョン子がごそごそしているのが分かったが、じきにそれも終わって、俺の部屋はとても静かになった。

「・・・・・・なあ」

「・・・・・・なに」

「女の子と同じ部屋で寝るなんて初めての経験なのに全然興奮しねーよ」

「そ、そりゃあ、そうでしょ」

「・・・・・・ねえ」

「・・・・・・なんだ」

「朝比奈先輩は・・・・女になると巨乳なんだな」

「ああ、すごいもんだぜ」

「・・・・・・なあ」

「・・・・・・なに」

「・・・・・・・・・・・・・・いや、なんでもねえ」

「あー悪かったなっ！貧乳でっ！」

ほら、なんてことのない、俺の部屋。

六話　湯呑でドリンク（前書き）

改めて・・・キョン子可愛いなぁと思いました。

アニメにならないかなぁ・・・。

六話　湯呑でドリンク

いよいよ土曜日になり、俺たち（誰と誰を示すのか分かるよな）は市民体育館へと急いでいた。しかし、よくもまあこの五日間を耐えきることができたぜ。俺も捨てたもんじゃないな。

ああ、もちろん涼宮キャプテンが考えた練習内容はそりゃもうすさまじかった。体力が必要だとか言って走らされまくった。こちとら運動部じゃねえぞ。

俺たちのバスケセンスもすさまじいことが判明したけどな。ある意味。

「おっそい！キョンたち罰金！二人で何かおごりなさい！」

涼宮ハルヒはいつでもどこでも元気１００％だ。なんで朝なのにこんなにはつらつとしてやがるのか、甚だ疑問だ。

体育館に入り、受付を済ませると、トーナメント表を配っている人がいたのでもらう。俺たちは、いきなり一回戦だった。相手は社会人チーム。どっかの会社で結成したらしい。ざ・おっさんズだってさ。ほんとにおっさんで構成されたチームだ。

「さあっ！いよいよゼッケンを渡すわ！バスケはなぜだか四番からはじまるらしいから、とりあえずあたしが四番！古泉君が五番ね！有希が六番で、キョン子は七番でキョンが八番ね！」

まあ、別に特に異論はないさ。俺たちはジャージの上からゼッケン

を身につける。

「あの～涼宮さん、わたしのは・・・」

「ああ、みくるちゃんはマネージャーよ！バスケにマネージャーがいなくてどうするの！」

そういってハルヒが紙袋から取り出したのは・・・やはりメイド服だった。

「あ、ひぇっ、えっと・・・」

「みくるちゃんには休憩のときにあったかいお茶を「なにを考えてるんだスポーツドリンクだろスポーツドリンク！」

「あんた、みくるちゃんがついでくれるお茶が「いえ、そういうわけじゃないんですよ朝比奈さん！俺は朝比奈さんのついでくれるものなら例え「いや、お茶は勘弁していただきたいです朝比奈先輩」

一応言うが、ハルヒ、俺、キョン子の順番でしゃべっている。

朝比奈さんは真っ赤な顔で、メイド服を着こなし、スポーツドリンクを湯呑についでくれることになった。敵チームのおっさんたちが唖然としている。

「でも良かったあ、草野球の時みたいに試合に出なくて」

朝比奈さんがつぶやいているのを目撃したキョン子は、首をかしげた。

「朝比奈先輩、草野球もＳＯＳ団でやったことあるんですか？」

「えっ？・・・草野球？・・・あれ、あれ？」

朝比奈さんは愛らしく首をかしげる。その様子を、長門が眺めていた。

そして、なんだかんだで一回戦が始まった。

「まあ、適当にやって負けよう。それがいい。あの時みたいに」

俺は古泉に耳打ちする。言ってる途中で気が付いた。あの時？

「・・・なあ古泉、俺たちは・・・なんだ、例えば草野球なんかしたことあったっけか？」

「草野球？さあ、あったかもしれませんしなかったかもしれませんね」

小泉が曖昧にうなずく。

また記憶が混乱してきた。ここ最近なにかがおかしいぞ。古泉は首をかしげた。

「あれ、本当にしたかどうか僕もあやふやです・・したような気がしますね、六月に」

嘘だ、六月は始まったばっかりだろ。

「そうなんですよねえ・・・・」

古泉が遠い目つきをする。

審判らしきおっさんがコートに現れた。なんかわりと本格的だ。俺たちが恥ずかしくなるからやめてくれ。

「ではこれよりざ・おっさんズ対チームＳＯＳの試合を始めます」

「ちょっとあんたたち！始まるわよ！ジャンプボールは古泉君に任せるわ！絶対取って！」

バスケはジャンプボールと言って、ジャンプでバスケットボールを取り合うことから始めるらしい。古泉は頑張って腕を伸ばしたが、完全にタイミングをミスったようだった。あえなくボールはざ・おっさんズだ。

おっさんズは絶対青年時代はバスケ部だったに違いないというおっさんばかりだった。すごく簡単にシュートを決められてしまった。

点数係が点数板の点数を２－０にした。あ、バスケって二点なんだと俺はその時初めて気が付いた。いや、まあ体育の授業でもやってたけど。

バスケは体格のスポーツだ、と聞いたことがある。はい、無理だ。女子三人に男子二人でしかも経験者０ってもうチームとして崩壊している。俺と古泉の代わりに朝比奈さんと鶴屋さんを入れて女子の部に参加すればよかったんだ。

と、思っていると、ハルヒがあっけなくスリーポイントシュートをきれいに決めた。スリーポイントラインからシュートすれば三点に

なるんだと。

点数が２－３になった。

「さあっ！キョン！ディフェンスよ！」

なんでお前はそんなに元気なんだ。俺はもうエネルギー切れが近いぜ。

そのあともハルヒが孤軍奮闘したが、ざ・おっさんズも伊達におっさんじゃないようで、ハルヒだけを徹底マークすればいいということに気が付き、第一クォーターが終わった時点でスコアは１４－８だった。俺たちはすごすごと朝比奈さんが迎えてくれるベンチへと退却した。

「みくるちゃん！水！」

ハルヒが朝比奈さんからスポーツドリンクのペットボトルを強奪し、がぶがぶ飲んだ。おい、お前一人で飲んだら今度こそ俺たちは絶命する。

バスケの試合は本来なら四クォーターで一クォーターは十分間らしい。だけどこの大会では一試合につき二クォーターのハーフゲームになっているみたいだ。ハルヒは試合が思うように進まないのが気に食わないのか、えらく不機嫌だった。

「第二クォーターに全てを賭けるわ！キョン！あんたも活躍しなさい！」

ちなみに八点は全てハルヒがとった。スリーポイントシュートが二

回、普通のジャンプシュートが一回だ。古泉が一度だけランニングシュートを仕掛けたが、笑顔で外した。長門に至ってはボールに触れてすらもいない。ただ淡々と走っていただけだ。まあ俺とキョン子も似たようなもんだけどな。

古泉の携帯が鳴る。古泉はそれに出てなにやら応対をしてすぐ切った。顔は古泉にしては深刻に見えなくもない顔だ。

「まずいですね・・・閉鎖空間が出現しました」

ああ、毎度おなじみの・・・な。ハルヒが不機嫌なばっかりに例の巨人も暴れてるってわけか。

「そういうことになりますね・・・」

「なら、ひょっとしたらこの試合、絶対勝たなきゃいけん・・・というわけだったりするか？」

俺は朝比奈さんからの湯呑の中のスポーツドリンクをありがたく頂いた。スポーツドリンク、温められていなくて本当に良かった。

「負けたらおそらく世界は崩壊するでしょうね」

そんなアホな。俺なんて人生、負けたことの方が多い。

「おいおい、ちょっと待てよ。あいつは何でも勝たなきゃ気が済まねーのか。子供か！？でも実際どうすりゃ勝てるっつーんだよ」

古泉はタオルで汗を拭きながら答えた。

「勝つ――というよりは、涼宮さんはあなたに活躍してもらいたいのだと思いますよ」

俺が？活躍？俺は溜息をついた。古泉がぽん、と手をたたく。

「そうだ、妙案を思いつきました。彼女の協力が必要です」

そう言って古泉は長門に近づいていった。

妙案、妙案ね・・・・・はあ。

七話　涼宮ハルヒの退屈

その妙案とやらはすぐに判明した。

第二クォーターにして最終クォーターが始まった。長門が俺の方によってくる。何やらぶつぶつと早口でつぶやいている。

「なんだ」

「この試合に勝利する」

そう宣言されてもな。

「つまり、あなたはただシュートを打って」

どこからつまりなんだ。まあいい。

嫌な予感はしたけどな。

ハルヒがドリブルして敵陣地に到達した。その途端二人のおっさんに囲まれる。この文章だけではおっさんたちはただの変態にしか見えないが、今はバスケをしているということを忘れるな。

俺はハルヒからパスをもらって、ゴールに向かってハルヒやおっさんたちのシュートの打ち方を思い出しつつ、見るからに下手くそなシュートフォームでボールを放った。

ボールはうまいことにボードを直撃し、そのままリングには触れずに落ちるかと思われた。

しかしボールはコート内の人間の予想をはるかに上回った。ボードを直撃した後、跳ね返りリングに縁にガツンと当たり、一瞬宙に浮く。そしてボールはそのまますぽっとネットに吸い込まれた。

皆、一様に唖然とする。朝比奈さんの歓声が聞こえる。点数係が自分の仕事を思い出したかのように、チームＳＯＳに三点を加えた。それを機に、おっさんズは攻撃を始めた。俺たちは慌ててディフェンスに戻る。

「・・・・長門か」

キョン子がつぶやく。俺は顔を引きつらせることで答えた。しかし、朝比奈さんがすごくうれしそうに手を振るのが見えたので、俺は一気にやる気が倍増した。

「ナイスシュートです」

古泉が微笑む。うれしかねーよ。ハルヒを見ると、ちょっと驚いたような怒ったような複雑な表情を浮かべていたが、俺が見ているのに気が付くと途端にそっぽを向いた。

そのあとは、ほぼ俺の独壇場だった。ざ・おっさんズはそれでもシュートを決めるが、俺がスリーポイントラインからかなり離れた所でシュートをばすばす決めるもんだから、おっさんズはやはり動揺していた。

いつのまにか、点数が１４－８から１６－１７で逆転していた。残り時間、１４秒。ボールは今はキョン子が持っている。キョン子は誰にパスを出そうか迷った挙句に俺にふわふわしたパスを出した。

めちゃめちゃしつこくディフェンスしていたおっさんがこれ幸いとボールをカットしようと手を伸ばした。

が、いつのまにか俺の手のひらにボールはあった。左腕を限界まで伸ばしていたおっさんは完全に不意を突かれた。

すいませんね、と思いつつシュートをしようと構える。が、べつのおっさんが俺の真ん前で腕を精一杯伸ばしていた。

あ、これは流石にブロックされるなと思ったが、俺が放ったボールは瞬時に軌道修正を行い、ゴール下にたまたまいた古泉の元へと向かった。

古泉は苦笑しながら、それでもちゃんとシュートは決めた。その直後、ブザーが鳴り響いた。

・・・・もう、これは無茶苦茶だ・・・・。

１６－１９。試合終了だ。俺たちは整列し、礼をした後、ベンチに下がった。

「いやあ、すごいですね、よもやあなたにそんな才能があったなんて」

古泉がしらじらしく言う。朝比奈さんは感激していた。

「すごいですね～、キョン君。すごいなぁ～、なんであんな遠いところからシュートが入るんですかぁ？」

キョン子はハルヒの様子をちらりと見やり、長門の動きを注視し、

俺ににやっと笑いかけた。『流石はわたし』『うるせー』

ハルヒからはもう複雑な表情は消えており、その代わりに満面の笑みを浮かべていた。湯呑をぐいっと傾けて、叫ぶ。

「よーしっ！一回戦は突破！この勢いで優勝するわよっ！」

ハルヒは朝比奈さんとフレンチカンカンを踊っていた。古泉が俺のそばに寄ってくる。

「さて、どうしますか？このまま優勝しますか？」

「いや、棄権だ。このまま試合を続けて長門の物理法則をあっけなく捻じ曲げるスーパーなマジックを続けるわけにもいかんだろ」

「それがいいでしょう。実は僕ももう神人退治に行かなくてはならないのですよ。一度できた閉鎖空間は広がりこそすれ、なくなることはないのです」

「ああ。ハルヒを説得する」

「はい、お願いしますよ。今日のこれで、涼宮さんの退屈はとても恐ろしいものだと知りえましたよ。また機関で検討します」

古泉が体育館から出ていくのを見送ると、俺はハルヒを朝比奈さんから引きはがすと、話があるとざ・おっさんズの方を指さした。

「気の毒だ、とは思わないか？」

「なんで？」

「きっとあのおっさんたちは仕事も家庭もかかえて、大変なんだろう。たぶんバスケがストレス発散、唯一の楽しみに違いない」

ざ・おっさんズは困ったように笑いながら、仲間と談笑していた。いやあ、勝ちたかったな、みたいな。

「まあそうかもね」

「ひょっとしたらもうこの大会で引退するおっさんもいたかもしれない、だろ？」

「さあ」

「というわけで、二回戦は棄権しよう。俺たちは充分楽しんだ。それに俺たちにはまだ楽しめることがたくさんあるだろ？それに実はもうくたくたなんだ。もう動けそうにない。まあ、このあと皆で飯でも行こうぜ」

ハルヒは俺を黙って上目で見つめた。考えているようである。

「あんたはそれでいいの？」

もちろんだ。

「ふうん。ま、いいわ。お腹すいたし。昼ごはんに行きましょ。あたし思ったんだけど、バスケってすごく簡単なスポーツだったのね」

俺はハルヒが案外おとなしく引き下がったのにも若干驚いたが、それよりも、ハルヒのセリフの方が気になった。

バスケって、すごく簡単なスポーツだったのね・・・？

何か引っかかりを覚える。俺は歩きながら首をかしげていると、朝比奈さんが愛らしい様子で駆けてきた。目が思ったよりも真剣だ。

「キョン君・・・わたしたち、やっぱり草野球しました・・・ね？

七話　涼宮ハルヒの退屈（後書き）

すいません、ルビの変換がうまくいっていなかったようで。
ご迷惑をおかけしました。

八話　八月のアブラゼミと世界の分割

さて、キョン子がこの世界に来てから、もう二か月がたとうとしていた。

その間に、七夕の日に三年前にタイムスリップして中学校の校庭に落書きしたり、巨大カマドウマを退治したり、期末試験を終わらせたり、夏休みが始まったり、孤島で殺人事件に巻き込まれたり色々すったもんだあった。ほんと・・・もう、だれか俺の苦労をねぎらってくれ。

そして気が付くと八月中旬。ここいらで俺はやっと一息つくことができたのだった。

俺とキョン子はたまたま二人とも午前中に起きて、テレビゲームに興じていた。格ゲーだ。今のところ戦績は五分五分と言ったところか。まあそれもそうかと言えばそれもそうだ。

俺（キョン子）とのふざけた同居も、大分慣れた。

俺の坊主頭で筋骨隆々のキャラクターが、キョン子の怪しげなインドの曲芸師のキャラクターにノックアウトされ、俺は呻きながらコントローラーを手放した。

「はい、アイスおごりー！」

キョン子がライトイエローのタンクトップの前をパタパタさせながら嬉しそうに言った。あろうことか、俺の部屋のエアコンはただいま絶賛故障中であった。俺自身もTシャツの背中が汗で若干しめっ

ている。

「くっそ・・・しゃーねー、行くかぁ」

俺とキョン子は近所のコンビニでアイスを買い求めるため、蒸し暑い外に飛び出した。自転車二人乗りをして出発する。俺が漕ぐのは悲しい現実だ。

「あー、やっぱ暑いー・・・はっ、おごりだけじゃなくてパシリ条件にすれば良かった」

キョン子がポニーテールをなびかせて、今更のように声を上げる。最もだ。

バスケットボールの模様のエナメルバッグを肩にかけて歩いている、中坊らしい奴を追い抜いた。中防は二人乗りしている俺たちをどこか羨ましそうに見ていた。

中坊よ、カン違いしているかもしれないが、後ろの小娘は俺自身なんだぜ？

とよっぽど言いたかったが、黙る。キョン子は中坊を振り返って見つめ、言った。

「あ、バスケ少年だ・・・・六月を思い出すなぁ」

ああ、六月ね。あ、そういえば朝比奈さんの最後の言葉の続きをまだ話してなかったな。

あの時、朝比奈さんはこう言った・・・・・・・・・

「キョン君・・・わたしたち、やっぱり草野球しました・・・ね？」

草野球！朝比奈さんの言葉で、俺はもやもやしたものが晴れた気がした。

「そうですよ、俺たち、絶対しましたよ。鶴屋さんと谷口国木田・・・」

「それにキョン君の妹さん、ですよね。わあ、やっぱり。古泉君も言っていたんです」

しかし、これはどういうことだ。同じ時期に別のことをした記憶があるとは・・・？

現在は高校一年の六月、で間違いはないはずだ。まるで前の年も俺たちは高一で、しかし六月には草野球をしたかのようだ。

長門の助けがいる、と思ったら長門がすでに近くにいた。ハルヒとキョン子は棄権の受付をしに事務室まで行った。

「たしかに今日、私たちはバスケットボールの大会に出た。これは事実。しかし、また草野球の大会に出た記憶もまた、事実」

「・・・まさか、前世の記憶とかそういうんじゃないだろうな」

「違う。二つの世界は同時に存在する」

分からんぞ、長門よ。朝比奈さんが言う。

「どうやら、長門さんの話を聞いて推測すると、私たちが現在いる世界は、涼宮さんによって作られた世界・・と考えたら辻褄が合うんです」

「すると、俺たちは別の世界からやってきたということですか？」

「いえ、おそらく・・・えーと、現在の世界をZ世界、別の世界をY世界と呼びますね。私たちがZに存在しているように、Yにも私たちが存在しているのだと思います。そして・・・えっと、X世界が原点、事の初めだと仮定すると、YとZはXから派生されうる未来である、という・・・」

俺は朝比奈さんが携帯電話を見ながら話していることに気づいた。

「ああ、古泉からのメールですか？」

朝比奈さんは飛び上がり、真っ赤になってあたふたした。

「え、え、なんで分かったんですかぁ・・・？」

そりゃあもちろん、あなたにそんな無味乾燥な話は似合わないからですよ。

「あくまでも予想の一つ。確証はない」

「お前が確証がないなんて珍しいじゃないか」

長門はほんの数ミリ首をかしげる。

「・・・涼宮ハルヒの思考回路は、トレース不能・・・情報不足・・

・」

だれだってそうだ。気に病む必要はねえぜ。気に病んでんのか？朝比奈さんは続ける。

「・・・それで、Z世界はY世界より遅くに誕生した、あるいはYのコピー、そう考えられます。だから、わたしたちはY世界でわたしたちが体験した記憶の断片を脳が覚えている・・・どうでしょう？」

朝比奈さんは少し困ったような、しかし人懐っこい笑顔を浮かべた・・・・・

「・・・キョン、おい！キョン！通り過ぎた！」

キョン子の声により、意識内から呼び戻された俺は、慌ててブレーキをかけた。キョン子がよろめくのが分かった。

「なに？急に考え事し始めてさー。財布忘れてないよな」

ああ、もちろんだ・・・ふん、Y世界とZ世界ね。朝比奈さん、というか古泉や長門の言うことが正しいなら、ひょっとしたらY世界にはキョン子はいないのかもな。第一男女逆転の世界があるっていう設定も、Z世界だけのものかもしれない・・・ま、どっちか選べって言われたら、そりゃまあ・・・

「キョン、ハーゲンダッツだからねハーゲンダッツ。自分に奢らせるんだから何にも気兼ねせずに済む」

キョン子はにやっと笑って言う。俺は肩をすくめた。

どっちか選べって言われたら、そりゃまあ一目瞭然だ。Z世界の俺にとっちゃな。

コンビニの外で、八月のアブラゼミがけたたましく鳴いていた。

八話　八月のアブラゼミと世界の分割（後書き）

次話　夏休み中にしなきゃダメなこと

九話　夏休み中にしなきゃダメなこと

わたし達がハルヒの呼び出しを受けたのは、それから数日後のことだった。

「遅いわよ、キョンたち。罰金よ！」

指定された行きつけの喫茶店に入ると開口一番、涼宮ハルヒ夏バージョンはそんなことを言った。古泉、長門、朝比奈先輩も揃っている。

「ここでもわたしは奢るはめになるのか・・・」

あっちでもわたしはハルヒコに奢らされてばかりだった。

見るとわたし男バージョン通称キョンはにやにや笑っていた。大方朝比奈先輩で眼福を・・・とでも思っているんだろう。なんか嫌だ、それは。

「さあ、これを見てちょうだい！」

わたしとキョンが席に着くやいなや、ハルヒが一枚の紙をずいっと渡した。

「夏休み中にしなきゃダメなこと・・・？」

「そ。ＳＯＳ団サマースペシャルシリーズよ！」

ハルヒは上機嫌だ。お冷をぐいっと飲み干して、キョンに人差し指を突き付けた。

「計画書よ計画書！夏休みのやつ、いつのまにかもう終わっちゃいそうじゃない！あと二週間もないのよ！まだ何にもしてないのに！不覚だったわ！」

わたしは改めて「計画書」を眺めた。「夏季合宿」だの、「プール」だの、「花火大会」やら、「天体観測」やら書いてある。そして「夏季合宿」の上には大きなバツ印があった。終わったってことだろうか？

「これ全部二週間足らずでやるのか・・・」

キョンのそのつぶやきの語尾に「？」はついていなかった。なるほど、流石「涼宮」の名を冠する人間についてのスペシャリストだ。涼宮達がやるといったのならそれはやるに決まっているのだ。

それで涼宮ハルヒがわたし（キョン女バージョン）と会いたいと思ったから、私はこの世界に来た。

・・・あれ、ハルヒコは？・・・涼宮ハルヒと涼宮ハルヒコが同時に同じ願いを願ったのなら・・・？その願いの優先権はどちらにあるんだろ？

「・・・おい、キョン子、いくぞ」

・・・随分とぼーっとしていたみたいだ。いつの間にか話は終わって、わたしを除いてＳＯＳ団は皆立ち上がって喫茶店を出ようとし

ていた。

「いくってどこにだよ？」

「そりゃ・・・あいつがなんのために水着持ってこいって言ったか考えりゃ、だ」

キョンは右手に持ったスポーツバックを持ち上げた。そう、ハルヒはわたしたちに水着持参の旨を伝えていた。

「プールかぁ・・・中三の夏以来だなぁ・・・」

わたしはそう言いながら立ち上がり、キョンとともに団員の代金を払うべく、レジに向かった。

ハルヒコ、じゃなくてハルヒが指定したのは市民プールだった。

それぞれ水着に着替え、更衣室から出た。わたしは朝比奈先輩が「ボン！」でいらっしゃることは知っていたが、ハルヒもそれなりに大きく、わたしが太刀打ちできるのは長門ぐらいだと知って若干へこんでいた。長門よ、ペタンコ同盟を結ぼうか、いやしかし・・・。

ハルヒは準備体操もなんにもせず、「飛び込み禁止」の看板が砕け散るぐらいの勢いでプールに飛び込んだ。

「早くみんな来なさい！競争するんだから！」

わたしたちは互いに目を合わせ、互いに肩をすくめた。

数時間後。

「・・・・」

わたしは朝比奈先輩が持ってきてくれていたピンクの花柄のビニールシートでのびていた。

最初に五十メートル競泳をしたものの、全て長門が完全勝利を収めた。ハルヒは長門にどうしても勝ちたかったらしく、その後何回も挑み続け、何回も敗れ、そしてようやく長門が空気を読んで負けたので果てしなく上機嫌だった。

そしてこれで終わりかと思いきや、今度は近くで遊んでいたジャリンコたちとビーチボールで遊び始めたのだった。ここで男性陣は速やかに退散、わたしも右ならえをすればよかったのだが、それは案の定

「みくるちゃんとキョン子は残りなさいっ！ガキンチョどもに大人の恐ろしさを思い知らせてやるわ！」

というハルヒのスーパー笑顔に阻まれたのだった。

「・・・はっ！？今しがた走馬燈が・・・」

わたしがばっと起き上がると、キョンと古泉が苦笑いしながらチェスをやっていた。

「ほら！みくるちゃん、そっち行ったわよ！」

「ふええ～はいぃ～」

朝比奈先輩はいまだにハルヒにつかまっている。キョンのクイーンが古泉のナイトを蹴散らしたのをわたしは横目で眺める。

「助けてくれてもいいじゃないか・・・」

「いや・・・助けたらなー。閉鎖空間がなー。神人が暴走したらなー」

ただ面倒だっただけでしょ。

「ばれたか・・・だがキョン子・・・そのオレンジのミニスカートみたいな水着、似合ってるぞ」

いや、すごくうれしくないから。ん？キョンに褒められるということは自画自賛ということになるのか。

「似合ってますよ、キョン子さん」

「もっとうれしくない。変態」

古泉は雷に打たれたような笑顔を浮かべた。なんのこっちゃ。

「へ、変態・・・ですか・・・」

「うん、この間言うの忘れてたけど、というか一番言い忘れちゃいけないことなんだけど、古泉一姫を語るうえで最も欠かせないワードがそれだから。この前欠いちゃったけど」

「・・なんと、確か先日のお話では『めっちゃ美人。巨乳だし。

性格もいいし。んで閉鎖空間でばんばん戦える』とのことでは」

「なんで一字一句違わず覚えてんだよ。どれだけ感動したんだよ」

キョンが冷静に突っ込む。

「ほんと・・・わたしにところ構わず抱きついたり・・ベタベタしたり・・・ひょっとしてあんたも変態なんじゃないの？」

古泉の笑顔が南国のブルーハワイほどに真っ青になった。なんのこっちゃパート2。キョンが気味悪そうに少し古泉から少し離れた。

「そんなはずでは・・・」

狼狽する古泉をほっといて、わたしはきょろきょろとあたりを見回した。長門がわたしたちと少し離れた所で体育座りをして本を読んでいた。

心なしかその様子は・・・

「長門？」

「なに」

「退屈？」

「・・・」

『ピュシャーッ！』

長門の返事を待っていると唐突に、ジャリンコの一人が手に持つ異様に巨大なデラックス水鉄砲で巨大な水流をわたしとキョンに放った。

「・・・・・」

「・・・・・」

「・・・・・ふう、チェスの安全は確保できましたよ、お二方」

「ばーかばーか！」

少年が変顔をしながら走り去る。

「待てこらっ！「このジャリっ！」このガキっ！」

少年はややびっくりした様子で、プールに飛び込んだ。わたしとキョンも続けて飛び込む。

「待ちやがれっ！」

キョンはざばざばと水をかき分けて少年に追いつこうとする。わたしも続こうとするが、少年のデラックス水鉄砲のやたら太い水流がわたしの認めたくはないが薄い胸を直撃した。

「ぐはっ！？なんか普通に痛いんだけど・・・というかこれ以上育たなくなったらどう責任とってくれるんだジャリンコ！」

周りの水鉄砲を持つジャリンコも面白がってわたしとキョンに砲撃を加えてきた。

「こらっ！ちょっと貸しなさい！」

わたしは一番近くにいた小さいジャリンコから小ぶりの水鉄砲を奪い取ると、先程の元凶のジャリンコを狙い撃った。

「うべっ！？」

しかしそれは大きく外れ、偶然振り返ったキョンの顔面にクリーンヒットした。

「おっと・・・まあ忘れよう、キョン。ぜひ忘れよう」

「・・・一回は一回だからな」

キョンも手頃なジャリンコから水鉄砲を（これならば水キャノンという方が正しいようなでかさ）奪い取り、わたしめがけて水流を放ってきた。わたしは慌てて逃げだす。

「ちょっと！なにしてんのよっ！」

ハルヒが近づいてきて、偶然その水流が（もう分かるでしょ？）

「キョン～っっっ！！！！」

そして、庶民プールみたいな市民プールで戦争が勃発した。

今日の成果・市民プールに水鉄砲持ち込み禁止の看板を立てさせた。

ん？

なんだろう？

その帰り道、キョンと下らないバカ話を繰り広げているとき。

な　に　か　が　ず　れ　て　い　る・・・

ような気がするのは、きっと疲れたからだろうな。

そうやって気づけないまま、真夏の太陽は沈んでいく。

九話　夏休み中にしなきゃダメなこと（後書き）

次話　エンドレスユーアークレイジー

十話　エンドレス・ユー・アー・クレイジー

「それにしても、なんだか妙にデジャヴ感のある一日だったな」

キョンがそんな言葉を吐いたのは、プールから帰ったその夜、くたびれてぼーっとしている時だった。

わたしはなにかがずれているような気がしていたのを思い出した。

「あー、うん・・・」

「なんだよ、お前もか？」

「いや・・・よくわかんない」

「あー、古泉方式で言うと・・・えー、なんだっけか、違う世界の俺達ももう夏休みに市民プールに行ってたってことか」

それとは少し違うような気がするんだけど・・・うーん、わからん。

ぴりりりりりり。

キョンの携帯が鳴った。

「・・・古泉か？なんだよ？・・・ああ？・・・ああ・・分かった、今行く」

「どうした？」

「いや、なんか要領を得ない説明だったんだが・・・駅前に来いとさ。朝比奈さんも長門もいるらしい」

「？なんかまた困ったことになったのか？」

キョンは財布を部屋着の尻ポケットに突っ込みながら、皮肉っぽく笑って答えなかった。

端的に結論。わたしたちは一万五千四百九十八回も高校一年生のこの夏休みを繰り返していた。

まずそのことについて愕然。ひどい、同じ宿題に約一万五千回も苦しんだと？答えを覚えていてもよさそうなものなのにな。

古泉は両腕を使って大げさに説明する。

「涼宮さんの力によって、八月十七日から八月三十一日までの二週間の世界が切り取られているのですよ。三十一日が過ぎようとすると、また全てがリセットされ、世界は十七日に戻ってしまうのです」

朝比奈先輩はさっきから半べそをかいている。未来に帰ることができなくなったそう。

このことについてまた愕然。ただのタイムマシンの故障じゃないんですよね？

「ということは、この世界には三十一日以降の未来がありません。

朝比奈さんが未来に帰ることができなくなったのも、これで納得できます」

長門はさっきから微動だにしない。長門は、長門だけはハルヒの力の影響を受けなかったから、一万五千四百九十もの二週間の記憶を保持しているらしい。

最後にこのことについて愕然。流石の長門でもそりゃこたえるって。

「実は僕も感じていたんですよ、時々起こる強烈な既視感をね。バスケットボール大会の時とはまた別の種類のような」

「・・・なんでハルヒはこんなことを？」

「・・・憶測ですが、涼宮さんは夏休みを終わらせたくないのでしょう。まだなにかやり残したことがあるような気がする・・・そんな無意識のうちに、夏休みをループさせてしまっているんでしょうね」

「またあいつは・・・どうやってループをストップできるんだよ」

キョンが振り向いて長門に尋ねる。確かにそれが最重要優先課題だ。

「わからない」

ＳＯＳ団の知識の宝庫、偉大なる図書館にして人類最後の希望の長門が分からないんじゃもうお手上げである。

「「ああ、もう、なんてこった」」

わたしとキョンの嘆息が重なった。

八月十八日
今日は昆虫採集というかセミ採りをしに北高周辺をうろついた。暑かったし、だるかった。すれ違う人々の奇異のまなざしが痛かった。わたしはセミを一匹も取れなかったことについて一つも悲しんでいない・・・。

八月十九日
今日はスーパーでバイトをした。ハルヒ以外全員間抜けなカエルの着ぐるみを着て、来店した子供たちに風船を配った。非常に暑かったし、非常にだるかった。そしてあろうことかバイト代は全て着ぐるみ代と化したというから、よっぽどキョンとクーデターを起こしてやろうかと思った次第であった。

八月二十日
今日は天体観測の日だった。長門のマンションの屋上で。蒸し暑かったし、眠たかった。ハルヒがＵＦＯを見つけるまで帰らないと言い張り、しかし真っ先に睡魔に襲われたのはあいつ自身であった。わたしはまあ、夏の大三角形を見つけることができただけで満足だった。

八月二十一日
いまだループ回避の方法見つからず。今日はバッティングセンターに行った。だるかった。ハルヒは遊びちぎっていた。日記も面倒くさくなってきた。わたしは元来面倒くさがりなのだ。むしろ四日も続いたことが驚異と言っていい。もうやめた。

そんな感じでだらだらとハルヒに付き合っていると、いつの間にか八月三十日の夜であった。つまり明日が終わればまた世界はリセットされてしまう。

「・・・ああ・・・ああ、分かった。おう」

俺は電話を切った。キョン子に事の次第を告げる。

「古泉が明日祭りがあるところを見つけたらしい。電車で駅三つ分って具合なとこにあるみたいだ。毎年八月三十一日に恒例の夏祭りなんだってよ。三十一日によくやるよな」

ハルヒの計画書に残っているのはあと「祭り」に「花火」の二つだった。古泉が祭りが開催されるところを見つけ次第、決行ということになっていた。

「まずいなぁ・・・このままだと本当にまたループする」

キョン子はベッドに寝転がりながらぼーっとつぶやいた。

「ああ・・・エンドレスワルツだぜ、どうする？」

「なんか考えろよ・・・あんたの・・・世界の・・・話だ・・・ろ・・・」

そのまますーすーと寝息を立て、キョン子は眠りについてしまった。まあこいつも疲れたんだろう。俺も寝よう。

ぱち、と部屋の電気を消した。明日には何かいい考えが浮かぶの

を期待しながら。

まあ、そんな時ほど浮かばないものなんだが。

十話　エンドレス・ユー・アー・クレイジー（後書き）

次話　何はともあれ祭りに違いなかった

十一話　なにはともあれ祭りに違いなかった

祭りは夕方からだった。よくある大きな神社でやるらしく、またその近くに川があるので、そこで花火大会も行われるそうだ。

ハルヒはしかしその数時間前に招集をかけて、何をするのかというと

「浴衣を買いによ、決まってるじゃない」

とのことだ。俺たちは毎度おなじみ駅前に集合すると、デパートの浴衣売場に直行した。

ハルヒは朝比奈さんと長門とキョン子の分の浴衣も勝手に選んで、試着室に三人まとめて放り込むと、自身も飛び込んだ。

若い女の店員が微笑みながら四人の着付けを手伝うが、それにしても着付けというのはかなり時間がかかるもので、俺と古泉は、真向かいにあった昔ながらの駄菓子屋感を醸し出している駄菓子屋をうろついてみたりした。

「キョン！ほら、どう？かわいいでしょみくるちゃん！？」

まったくだ。全面的に同意するぜ。

ハルヒは派手なハイビスカス柄、朝比奈さんはほんわかした金魚模様、長門は長門らしいと言えば長門らしい幾何学的な模様で、キョン子は風鈴模様で鮮やかな夕焼け色の浴衣だった。それぞれの個

性がにじみ出ている。

「とてもよくお似合いですね」

ハルヒたちが会計を済ませている間、着付けを手伝った若い女の店員が俺と古泉ににこやかに言った。

「それで、一体どういうカップリングになっているんですか？」

・・・・・・・・男女の比が等しくなくてほっとすべきところだろう。

そのあと、電車に揺られること数分、日が傾きだしたころに祭り会場についた。会場はすでに市民でにぎわっており、祭囃子が流れ、気持ちを高ぶらせた。

「さあ、遊びまくるわよ！まずみくるちゃん、金魚すくいよ！」

「あ、はい、あ、ちょっと待って・・・」

ハルヒは朝比奈さんを瞬く間に金魚すくいへと引っ張っていった。長門は高台の上で盆踊りをしている連中をじーっと見つめている。この祭りに来るのも一万五千・・・なんたら回目なんだろう？わざわざ付き合うこともないんだぜ？

キョン子がいなくなったと思ったら、またすぐに戻ってきた。どこぞの、カップ麺ができるまでの時間で怪獣を倒さねばならない宇宙人的ヒーローのお面と、これまたものすごく普遍的なひょっとこのお面を両手に抱えている。

「ほら、長門」

キョン子が長門に宇宙人的ヒーローのお面を頭の横につけてやった。

「なんか・・・思い出したんだ」

俺の目線に気が付いたキョン子が、自身にひょっとこをつけながらはにかむように言う。

確かに長門はお面をつけていたような気がする。

「まあ・・とにかく食おうぜ、たこ焼き食うか?」

そう言うと俺はたこ焼きの屋台に向かって歩き出した。

ループすると分かっていても、楽しめるものは楽しまなくちゃな。

ひとしきり遊んだあと、俺たちはお化け屋敷を訪れていた。

「・・・ハルヒ、まじで「入るに決まってるでしょ!余すところなく遊ばなきゃね!」

古泉が苦笑する。朝比奈さんはぶるぶるとまるで小動物のようなかわいらしさで震えていた。長門は無反応で、キョン子の顔には「怖いけどちょっと入ってみたくもある」と書いてあった。

「さあ、行くわよ!あたしについてきなさい!」

「ひえええぇ、ほんとに行くんですかぁ・・・？」

ハルヒはさっさと見るからに怪しげな入口に消えてしまった。俺と長門が続き、その後ろに古泉と朝比奈さん、それにキョン子が続いた。

ぼんやりとしたろうそくのような明かりしか明かりは見当たらず、薄暗かった。おどろおどろしいＢＧＭが流れている。それにどことなく冷たい風が吹いているような気がしてならない。

すると突然キョン子が悲鳴を上げた。

「ひやっ！」どん！「ひいっ！」どん！「おっと」どん！「・・・」どん！「うおっ！」どん！「きゃっ！」

キョン子が急に朝比奈さんにぶつかるもんだから、全員がドミノのように前にいたやつにぶつかった。

「なにやってんだよ・・・」

「ご、ごめん・・や、なにかが首に・・・」

「ちょっとキョン！早くどきなさい！」

「ん？ああ、すまん、今どく・・・はっ！朝比奈さんは大丈夫ですかー！」

「・・・・きゅう」

「・・・朝比奈さん？」

「みなさん、どうやら朝比奈さんは気絶してしまわれたようです」

「うわあ、すいません朝比奈先輩！」

「先に行ってください、僕たちも後で追いつきますので」

朝比奈さんはどうやら古泉とキョン子が介抱しているようだ。できれば俺が替わりたかったが、暗いので通路がどうなっているのかもわからず、仕方なく俺達は三人を残してそろそろと歩き出した。

「きゃ・・ちょっとキョン！なにやってるのよ！」

「は？なにって歩いてるだけだが」

「え？じゃあこれ・・・」

そのとき偶然にも（これも屋敷側の計算のうちなのか）明かりが俺たちをちょうど照らし出した。妙なシルエットが浮かび上がる。

ハルヒの肩を髪の長い血だらけの女ががっしりと掴んでいた。

「「・・・・・・・・・・・・・・・」」

「「ぎゃあああああああああああっ！！！！！！！！」」

もう誰の悲鳴かもわからないし、どこに行けばいいのかもわからず、誰がいないのかもわからなくなったが、俺たちはとにかくびびって逃げ惑った。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・」

気が付くと俺は荒い息を弾ませ、一人で立っていた。

「・・・？キョンなの？」

訂正。すぐ目の前にハルヒがいた。

十二話　終わらない夏の終わり

「あーあびっくりした。あのお化け、近づく気配すらもしなかったもの。こんなにびっくりしたのはいつ振りかしら」

落ち着きを取り戻そうとするハルヒの声だけが聞こえる。俺は手探りでハルヒに近づいた。

「ハルヒ」

「なによ」

「手、だせ。どこにいるかもわからん。手つないでた方が動きやすいだろ」

不意に押し黙るハルヒ。俺はハルヒが話も聞かずさっさと行ってしまったのではないかと不安に駆られた。

「おい？ハルヒ？」

「・・・・わ、わかったわよ、ほら」

ハルヒが手を（よく見えないがたぶん右手）をこちらに差し出した。俺は何度か空振りしながらも、ハルヒの右手を？まえることに成功する。

「・・・行くわよ・・・あ」

ハルヒが歩きだしそうな気配だったので、俺も踏み出そうとするが、急にハルヒとつないだ左手がぐいっと地面の方に引っ張られた。

「どうした？」

転んだのか？

「走った時に下駄の鼻緒、ちぎれたみたい・・・」

ハルヒが珍しく困ったような、気落ちしたような声色を出す。

――そんな声出されると――なんつーか、うまく言えねーけど。

俺はハルヒがいるあたりにしゃがみこんだ。

「ほら、おぶってやるから」

「・・・え？一人で歩けないことないわよ、鼻緒ちぎれたくらいで」

いいから、こんな時ぐらい強がるなって。

ハルヒはしばらく黙っていたが、やがてそろそろと俺の背中にまたがった。

俺はハルヒが乗ったことを確認すると、ゆっくりと立ち上がった。

「さー行くか。大分走ったからな、出口ももうすぐだろ」

「・・・・・・」

幽霊は、もう出なかった。

だいたい予想はついていたが、やはり出口を抜けると全員が揃っていた。長門が新しい下駄をハルヒに差し出したときは少し面食らったがね。

「遅かったですね、二人で何をされていたんですか？」

古泉が言う。なにもしてねーよ。馬鹿かお前は。それより朝比奈さんは大丈夫だったんですか。

「はい、気が付いたら古泉君と二人で出口を抜けていました。心配かけてごめんね、キョン君」

気が付いたらですと？古泉お前こそ朝比奈さんに何もしなかっただろうな。返答次第ではお前が朝日を拝める日もう二度と来ないぜ。

古泉はにこやかにほほ笑んで、両手を上げて自身の潔白を証明しようとした。まあ今はいい。

キョン子は途中でひょっとこのお面を落として探しているといつのまにか古泉と朝比奈さんからはぐれたらしい。それで困って右往左往していると長門が助けに来たのだとか。

「せっかく買ったのに」

キョン子は唇をとがらせて言った。まあ長門がお前を見つけてくれただけ良かっただろ。ちゃんと感謝しておけ。

俺がおぶさっている間ずっと静かだったハルヒはもうすでに元気を取り戻していた。

「お化け屋敷もなかなか楽しかったわね！さあ、次はいよいよ花火大会ねっ！早く河川敷に行って場所をとるわよ！」

さっそうと歩きだすハルヒに笑みをこぼしながら、俺達も続く。

古泉が話しかけてくる。

「・・・ところで、本物の幽霊に会ったとは本当ですか？」

「は？本物？」

「長門さんが言っておられたのですよ。長門さんは真っ先に出口にたどり着くと、またその幽霊を退治しに戻ったらしいのです」

「・・・まさか、ハルヒが」

「ええ、そのまさかですよ。もっとも今回はなんとなく予想はついていたのですが。涼宮さんはお化け屋敷に本物の幽霊がいたらさぞかし楽しいだろうと思ったのでしょうね」

お化け屋敷に本物の幽霊か。確かにハルヒらしいな。ひょっとしてハルヒの肩を掴んだあの髪の長い血だらけの女の幽霊は本物だっ

たのか？いや、きっとそうに違いない。

そうでなけりゃ、ハルヒがあんなにびびるはずねーもんな。

俺たちが河川敷に行くと、もうすでにかなりの人が陣取っていた。なんとかあいていた場所を見つけ、じかに座り込む。

やがて花火が始まると、あちこちで歓声が聞こえるようになった。

きれいな花が夜空に咲くたびに、ぼんやりとそれに照らされるハルヒや朝比奈さんたちの顔は本当に楽しそうで。

俺も思わず、笑みをこぼしてしまったほどだった。キョン子はお面を落としたことをまだぐずっていたが、俺がまた買ってやるとそれも直った。

・・・だが、今までやったことはやはり一万五千四百九十七回目のことなのだろうか。

結局、またハルヒは、世界をまたリセットしてしまうのだろうか。

どんな楽しいことも、必ず終わりがある。終わりがあるから楽しめる。そうじゃないのか、ハルヒ。終わりがないということは、時に残酷なことなんだぜ？

最後の花火が闇に溶けていき、花火大会は終わった。人はぞろぞろと帰りだす。俺達も何となく無言でその波にもまれ、集合できた

のは神社を出てからだった。

「・・・なら、もう帰りましょうか。明日から学校だしね」

ぽつり、とハルヒはつぶやくように言った。

何か言わなければ。ハルヒが帰ってしまう。

「ええ、そうですね・・・」

古泉が歯切れ悪く言う。

「・・・・じゃあ、また明日ね」

そう言うと奴はくるりと背を向けて、家に帰るべく歩き出した。

何か言わなければ！

「ハルヒ！」

ハルヒが驚いたように振り返る。俺は言いたいことをまとめるでもなく叫ぶ。

「この夏休み、いろいろやったけどまじ楽しかったぜ！お前のお蔭だ、ありがとよ！また来年もみんなでバカみたいに遊ぼうぜ！今年の夏よりもっと楽しくしよう！再来年もだ！いや、高校卒業してもだ！大人になってもまた同じように楽しくやろう！なあ、分かるだろ！？俺達には夏休みなんていくらでもあるんだよ！何回だって夏休みは来るんだって！だから・・・だからさ・・・！」

高1の夏をそんなに繰り返さなくたって。

言葉に詰まった俺を、きょとんとした顔でハルヒは見つめた。そして、ハルヒは。

「あったりまえじゃない！」

その笑顔は、いつものハルヒ、そのまんまだった。

十二話　終わらない夏の終わり（後書き）

次話　十月の紅葉と溜息の後の文化祭

十三話　十月の紅葉と溜息の後の文化祭（前書き）

やっと秋らしい気温になってきましたね。

十三話　十月の紅葉と溜息の後の文化祭

暦上では秋で間違いはないが、それにしても妙に残暑が長引く。

終わらない夏休みを終えると、九月なんてテストだの体育祭だの文化祭の準備だので光速で過ぎ去ってしまった。ニュートリノよりは遅いがね。

「ねえキョン？聞いてる？どこまわろうか？」

国木田の声で俺は現実に呼び戻される。

「だから言ってるだろ、もちろん朝比奈さんのクラスのコスプレ喫茶だ！」

そんなことを言うのは俺とアホ同盟を結ぶ谷口だ。俺も同意する。朝比奈さんがどんな服装なのか滅茶苦茶興味がある！

朝比奈さんのクラスまで行くと、もうすでに長蛇の列で多少げんなりするものの、目に飛び込んできた鶴屋さんのウエイトレスバージョンを見てそんなもんはあっさり吹き飛んだ。

「やあやあキョン君とその友達たち！いらっしゃい！」

鶴屋さんはハルヒに負けず劣らずの笑顔をふりまきながらこちらにやってきた。

「どうにょろ？この衣装っ！」

素晴らしく似合っていますよ、鶴屋さん。

谷口も国木田も鶴屋さんをまじまじと見つめている。、このクラスには、ひょっとしたらデザイナーの卵でもおられるのではないかと思うほど、衣装はすごいものだった。

「盛況ですね」

俺が言うと、鶴屋さんは見る人まで楽しくなってくるような笑顔で答えた。

「メニューは安っぽい焼きそばと水道水だけ！これでたんまり儲かるんだからもー笑いが止まんないねっ！」

ちょっと待てばすぐ入れるにょろ！と鶴屋さんは言ったが、結局三十分は待ち、ようやく教室に入ることができた。

「いらっしゃいませ～ご来店ありがとうございますぅ」

われらが女神、朝比奈さんが水の入ったコップをもってご登場なさった。ははー、ありがとうございます。

「キョン君と、友達の、えと、「谷口です！」「国木田です」

朝比奈さんのウエイトレス姿もまた似合っていた。朝比奈さんは天使のように二人に微笑む。

「映画のエキストラ、どうもありがとう」

「はい！いや、朝比奈さんのためならなんだってする所存です！」

谷口が威勢よく言った。

ん？ああ、エキストラね。我ら史上最強のおバカ集団、ＳＯＳ団はこの文化祭に向けて映画という名のついた悪夢を撮影していたのだった。谷口と国木田はその時に俺に呼び出されたのだった。

朝比奈さんにつられたようだったが、あまりいい目は見られなかったな。

そしてその悪夢は本日、視聴覚室で絶賛上映中であった。

それから程なくして焼きそばがやってきたが、店内はごった返し、大盛況なので俺たちはいそいそと食べる他なかった。朝比奈さんとももうそれきりであった。

「うーん、あんまり食べた気がしないけど、どうする？また食べ物を探す？」

教室から出て、国木田が全員の気持ちを代弁して言う。

「俺は無論、朝比奈さんのお姿を拝見できただけで腹はいっぱい、と言いたいところだが妄想は実物のエネルギーにはならねえ。俺は食べ物とあと女を探しに行くぜ」

なんだそのどや顔は。

「ナンパだよナンパ！暇そうに三人ぐらいで固まって歩いてる私服が狙い目だぜ！」

いや、俺は遠慮しよう。お前の船に乗ってるとナンパするまでもなく難破しそうだからな。

「上手いことでも言ったつもりか！だがな、そう調子こいていられるのも今のうちだぜ？・・・まあお前には涼宮がいるしな・・・今決めた、俺が今年のクリスマスを一人で過ごすことはない！はっはー！絶対クリスマスまでに女捕まえて見せるぜ！」

なにか途中でものすごく不可思議なことを言ったような気もするが、まあ気にしないでおいてやろう。せいぜい頑張れよ、谷口。

谷口はそのまま風と共にフェードアウトし、国木田はＳＯＳ団の映画を見に行った。俺はどこに行こうにも、どうにも面倒くさくてぶらぶら歩きだした。

ちなみにハルヒはバニーガールコスで映画のビラ配りだったはずだ。長門は占い、小泉は劇だ。

「おー、キョン」

キョン子と曲がり角で偶然にも鉢合わせした。

「おー、お前も一人か」

キョン子は片手にプログラムを丸めて、もう片手にはどこで手に入れたのか綿あめを携えていた。

「暇そうだなー」

キョン子がそう言いながら無造作に差し出す綿あめを受け取り、少しだけかじる。口の中に甘みがふわっと溶け、そのまま一瞬で消えてなくなった。

「お前もな」

「行くあてないんだったら講堂でも行かない？バンド演奏会やってるんだって」

軽音楽部と一般参加のバンドによる演奏会、か。座ってぼーっとするにはちょうどいいな。

というわけで、俺とキョン子は講堂に行くこととなった。二人で並んで歩きながら、教室の催し物をぼんやり眺めたりする。

キョン子か。そう言えば九月に、キョン子に関する重大なイベントが起きていたのを忘れていた。

キョン子の携帯に、あっちの世界からの長門からメールが入ったのだ。

・・・・・・あっちの世界と表現するとなんだか勘違いされるようだが、もちろんキョン子の世界のことである。

そのメールの内容を要約すると、キョン子が帰ってこないことに業を煮やした涼宮ハルヒコ（ハルヒの男版だ）が自身の能力をフルに使用し、その世界の時間をキョン子がいなくなった頃の六月まで戻すと、そのまま時間を凍結させてしまった、ということらしい。

なんとまあ、ハルヒコってのは。ハルヒ並みだな。笑えるな。

キョン子の取り乱し方はちっとも笑えなかったがな。

あっちの世界の長門はこっちのと同様、ハルヒの時空改変の能力を受け付けないので難を逃れたらしい。この時間凍結を元に戻すには、キョン子があちら側の世界に帰ることが必要条件だと。

メールを見るに、あっちの長門も具体的にどうすればキョン子が帰ることができるのか分からないみたいだ。ただ、ヒントが残されていた。

《静かに降る雪の為に、あなたは聖夜に願うだろう》

《聖夜の願いはいつだって、そっと空に届くだろう》

《空に届くその願いは、やがて雪を降らせるだろう》

あっちの世界の長門はどうやら宇宙人から詩人にジョブを変更したらしい。何が言いたいのかさっぱり分からない。

古泉たちとも頭をひねったのだったがお手上げだった。そもそもこちらの長門の回答が「分からない」なのだから、凡人が解読しようなど愚の骨頂である。

だが冬、特にクリスマスまで待てば何か分かるに違いない、と俺たちはひとまず解読を打ち切った。

キョン子もここでじたばたしても何の解決にならないということを悟ったらしく、もう取り乱さなくなった。

キョン子は今では苦笑交じりに言う。

「まったく、ハルヒコにはやれやれだ」

キョン子は俺の逆転であるが、百パーセント裏返しかと言えばそうでもないようだ。この四か月で段々と分かってきた。

全体的には完璧に同じようで、しかし細部にわたると微妙に異なる。まさしくハルヒの考えることのような、大雑把な感じであるのだ、俺とキョン子の関係は。

講堂に到着した。うるさいパンク系のバンドが一生懸命頑張っている。

演奏が終わり、次のバンドの名前が紹介され、バンドメンバーたちがぞろぞろと袖から出てくる。

「「げっ！」」

一番最初に出てきた人物に、俺とキョン子は一斉に息をのんだ。

バニーガールで映画のビラを配っているはずの人物――

ハルヒが、ギターとマイクをひっつかんでステージに登場した。

十三話　十月の紅葉と溜息の後の文化祭（後書き）

やー楽しいですー！

十四話　神のみぞ知る（前書き）

不定期更新ですいませんｏｒｚ

十四話　神のみぞ知る

それだけならまだ良かった。が、

「長門もか・・・」

占いをやっていたはずの長門もステージに上がってきた。ハルヒにギターを手渡されている。ハルヒは譜面台を目の前に置いたりなど、セッティングを当たり前のように始めた。

会場の雰囲気が怪しくなってきた。うーむ、これでもまたＳＯＳ団の変態性がより一層囁かれることだろうよ。

残りのベース担当とドラム担当の女子生徒はまともな人だった。見かけない顔で大人っぽいから、まあ三年生か。

そしてハルヒたちは、何の前触れもなしに、演奏を始めた。

ハルヒの透き通るような歌声に、しばらく唖然として硬直していた俺は、思わずはっとさせられた。観衆たちも一様だ。

・・・・私ついていくよ
　　どんな辛い世界の闇の中でさえ
　　きっとあなたは輝いて・・・・

こいつ、ほんと何やらせても。

正直に白状すると、俺はハルヒの歌に聞き入っていた。長門のギ

ターテクニックも宇宙人並の物凄さだった。

そして気が付くと、もう三曲目が演奏され始めていた。

「やあ、これはこれは」

俺の隣に劇の衣装なのか、妙な服装をした古泉が腰掛けた。

「なに、噂を聞いたものですから」

『あの有名な一年の涼宮ハルヒが、講堂でまたやらかしているらしい』

そんな噂が学校中に急速に広まっているようだ。客がどんどん入って来ていて、三曲目が終わるともう講堂はほぼいっぱいになっていた。

「えー、あのー」

ぶっつづけで歌っていたハルヒが初めて歌詞以外の言葉を話した。

「ここでバンドの紹介をしなくちゃなんだけど、実はあたしと、このギターの・・・有希は、このバンドの正式なメンバーじゃありません。あくまで代理です。ほんとはこのバンドには正式なボーカル兼ギターの人がいるんだけど、事情があってできなくなっちゃって。あたしがちょうど居合わせたもんだから・・・代役が務まったかどうか自信ないけど・・・」

そこでハルヒは言葉を切って、ベースとドラムの女子生徒に自己紹介させた。

「えと、そう、代役じゃなくほんとのボーカルがやってる曲が聞きたい人は、あとで言って。・・・無料でダビングするから。いいわよね？」

ハルヒの問いかけに、ベースの女子生徒はちょっと笑ってぎこちなくうなずいた。

「じゃあ・・・ラスト！」

俺とキョン子がハルヒからわけを聞いたのは、文化祭が終わってからの、最初の昼休みだった。

「なんか校門で誰かがもみ合っててね。なんだろなと思ったら、あのバンドメンバーたちと文化祭の実行委員が言い争ってるのよ。ボーカルの子をステージに立たせる立たせないって」

そのボーカルの先輩はどうしたというんだ。

「この日のために必死に練習してきたのに、扁桃炎になっちゃったんだってさ。熱もあったみたいで、ふらふらよ。それでもどうしても出たいって」

「そりゃ・・・根性あるなぁ」

キョン子が言った。ハルヒはうなずく。

「やっぱ三年生で最後の年だから絶対やりたかったのよ。実行委

員は頑張って病院に連れて行こうとしてたけど、あの人、懸命に訴えてたわ」

お前ならそんな奴らも扁桃炎も蹴散らしてステージに立つんだろうな。

「まあそうね。でも彼女はもう流石に無理っぽそうだったわ。私から見てもね。でもかわいそうじゃない。せっかく練習したのに、本番に出られないなんて。だからせめてあたしが出ようか？って。そしたらバンドとしては曲は発表できるでしょ」

「よくＯＫしたよ。その先輩も」

キョン子がびっくりした目でハルヒを見つめた。ハルヒは首をかしげる。

「『あなたなら、できそうね』って。あたしのこと知ってたみたいね」

北高にお前を知らん奴なんていねーよ。今きっとキョン子も同じツッコミをしたに違いない。

「それで時間もないし急いでデモテープとか譜面とかもらって一生懸命メロディー覚えたわ。ギターは流石に無理そうだったから、有希に頼んだわ。あの子いったいどこでギターなんて習ったのかしらね。完璧に弾いて見せたもんだから、メンバーたち、びっくりしちゃって」

「ハルヒの歌にもびっくりしただろうなー。わたしもびびったし。・・・あ、ほら、噂をすればって奴だ。ハルヒ」

キョン子が教室の外を指さす。先のバンドメンバーたちが、教室の入り口に立っていた。

「ハルヒ、行ってこいよ」

「・・・・」

ハルヒは立ち上がるが、ついでに俺の襟首も引っ張った。

「あんたもついてきてよ」

そのままずるずると引きずられ、俺はバンドメンバーたちと対面することとなった。

「ダビング希望の人がすごくいっぱい来てくれてるの。みんなあなたのお蔭よ、ありがとう、涼宮さん」

ダビングMD希望が殺到しているようだ。確かにいい曲だったからな。ずっと練習してきて息もぴったりの、本当の曲も聞いてみたくなるのも無理ないさ。即席バンドでこれだけの良さってことは・・・ってな。

聞けば曲も自主制作だったようだ。三人の先輩は本当にうれしそうで、ハルヒに何度もお礼を言った。

ハルヒは少し居心地が悪いような心持のようだった。

「いいのよ本当に、お礼なんか。あたしより有希に言ってくれる？あの子はあたしが無理やりやらせたようなもんだから」

長門にはもうお礼済みだとさ。

「それじゃあ、卒業までに一回またライブやろうと思うから、ぜひ来てね」

バンドのボーカリストは目を細めて俺を見た。

「その、オトモダチと一緒にね」

席に戻ると、キョン子が微妙な顔つきで俺たちを眺めていた。

「どうした？」

キョン子は何も言わず、皮肉っぽく口唇をゆがめると肩をすくめた。

ハルヒは席に着くなり机に突っ伏した。

「どうした？」

こちらにも声をかける。

「・・・・なんか、落ち着かない。変な気分だわ」

また憂鬱か、それとも溜息か？はたまた、退屈の予兆か？

とは思ったが、違うってことはきっと俺が一番わかってる。

ハルヒ、お前がお前になってから人に面と向かって感謝されたことなんか、ほとんどなかったんじゃないか？喜ばれるようなこともやってこなかっただろうな。だから率直な感謝の言葉に、お前はどうしていいか分からないんだろう？

教えてやるよ、ハルヒ。そんな言葉は素直に受け取っていいのさ。誰も文句は言わないし、なにも変なことじゃない。人から喜ばれた、ってうれしく思えばいいんだ。

その微かな気持ちを忘れるなよな、ハルヒ。

・・・と、まあ君子のような言葉を頭の中で反芻しつつも、結局俺は

「珍しいこともあるんだな」

としか言わなかった。恥ずかしくて言えるかよ、そんな偉そうな言葉。なにより変な目で見られるに決まってるさ。

それに、俺もハルヒもそんな柄じゃないしな。

十五話　秋のうららかな陽光と戦争の勃発

文化祭も無事（あれを無事というのなら）終了し、北高にも静けさが戻ってきた。

それにしても今日の部室はのどかだ。何故だと思う？

「ハルヒがいないからだ」

キョン子がだるそうに言った。お前はいつもだるそうだな。

「あんたもな」

そうかい。

ハルヒ以外の団員は全員集合していた。長門はいつも通り隅っこで読書にふけっているし（読書の秋というが、こいつの場合読書の四季である）、朝比奈さんは何故か熱心に俺たちの為にお茶を沸かしていた。

そして古泉と俺は、チェスに興じていた。古泉はもちろん弱い。俺は黒のクイーンを縦横無尽に走らせ、古泉軍を蹴散らしていた。

クイーンに与えられた理不尽なまでの破壊力に少なからず感嘆しつつも、俺が白のルークを取ったその時だった。

こんこん。

この部室にノックするとは、ハルヒ以外の人間であることは確かだ。ついに生徒会が俺たちの数々の蛮行に黙っちゃおけんと乗り込んできたか。もしくは教師か。それともケンカを売る相手を間違えたヤンキーか。

「はーい？」

朝比奈さんが愛くるしい仕草でドアを開ける。

「あ・・」

どうやら予想とは違うようだ。

春の候、ハルヒにパソコンを強奪された、コンピ研部長氏であった。

キョン子の眠そうな目が少しだけ開かれる。お前も知ってるのか、コンピ研。

「ああ、やっぱりコンピ研か。部長氏は男になってるんだな。よく見ると目元とか変わってない気がする」

「いつだって僕は男だが・・・」

部長氏が出鼻をくじかれた様子である。すいませんね、どういったご用件で？

部長氏はきょろきょろと不安げに部室内を見わたし、つぶやく。

「だ、団長殿は不在か・・・良かっ「今来たわっ！」えぎゃふぉっ！？」

いきなり出現したハルヒがハレーすい星のごとく部長氏にドロップキックをかました。部長氏に背後霊のようにくっついていた他コンピ研部員が慌てて部長氏に駆け寄る。

「ついに生徒会がわたしたちの数々の栄光を横取りしようと乗り込んできたのっ！もしくは教師っ！？それともケンカを売る相手を間違えたヤンキーかしらっ！」

俺の脳内台詞と妙に合致しているところがままあるが、気のせいに違いない。

俺はとりあえずハルヒをなだめ、部長氏の話を聞くことにした。

「ぜひ、これで僕たちと勝負してほしい」

と言って部長氏が差し出したのは一枚のＣＤだった。ゲームソフトが入っているらしい。

簡単に言えば、彼らはハルヒに強奪されたパソコンを返してほしいらしい。それで彼らは自分たちで作ったパソコンゲームでＳＯＳ団と勝負し、勝利した暁にはパソコンを要求するようだ。

「それならあんたたちだって何かかけなさいよ、当たり前のことだわ」

「僕たちが負ければ潔く引き下がり、もう二度と言い出さないよ」

ハルヒは表情こそ不機嫌だが、内心ではうきうきしていることと間違いないだろう。

「へーえ、でもそれじゃあたしたちにとっては利益ないんじゃないの？」

「な、なら君たちが勝ったら団員全員分のノートパソコンを進呈しよう！それならどうだい？」

大した自信だ。恐らく製作者側なだけものすごくやりこんでいるに違いない。

「ふーん、大した自信じゃない。まあものすごくやりこんでるに違いないわね・・・ふん、でもいいわ、受けて立ちましょう！」

ハルヒはやはり最後には不機嫌な面の皮を脱ぎ捨て、満面の笑みを浮かべて宣言した。

それにしてもお前、さっきから俺の心を読んでるのか？

さて、ゲームの内容をかいつまんで説明しようか。

タイトルは『Ｔｈｅ　Ｄａｙ　ｏｆ　Ｌｉｂｒａ　４』。頑張りすぎて空回りしている感が否めないタイトルである。別に４だからと言って１、２、３があるわけではないらしい。

まあ、平たく言っちゃ戦争ゲームだ。対立する二つの人種・・・まあＳＯＳ人とコンピ人がついに戦争を起こし、膠着状態がどうた

ら・・・という流れらしい。和平とか条約とかそんな平和的解決法は全て無視だと。そんなもん最初から存在しないようである。

どことなく異世界を思わせる世界観であるが、マップはただ単に世界地図を逆さまにしたものだと俺は気付いた。

軍隊は陸軍、海軍、空軍に分かれ、それぞれ二人ずつが指揮をとるらしい。つまり敵味方六人ずつの計十二人で行うゲームってわけだな。

「人数がぴったりじゃない！」

ハルヒがうれしそうに叫ぶ。そうですねー。

三つの軍それぞれに特色があって、陸軍なら戦車と歩兵を扱う。陸軍は陸上でしか動くことができない。歩兵は三軍でもっとも弱いユニットだが、対戦車用に地雷の設置ができるそうだ。戦車は大砲、とかな。

「なかなか渋いな」

キョン子が面白そうに言う。俺も思ったぜ。

海軍は戦艦で、もちろん海でしか活動できない。一番体力が多い。

空軍の戦闘機は数こそ少なめに設定されているが、唯一すべてのエリアで活動可能。三軍で最強ゆえ、全滅すると非常に手痛い。

六人の中で誰かひとり将軍を決め、そいつが操る軍が全滅すると負け。全滅させたら勝ちだ。どれだけ他のやつを全滅させても、将

軍が生き延びていれば負けにはならない。
将軍の軍隊には、例えば戦車だったら巨大戦車、海軍だったら巨大母艦、というように大きくて体力もあるユニットが存在するそうだから、一目でどれが将軍か分かるとのことだ。

「あたしが将軍！」

コンピ研の連中が手際よく五人分のノートパソコンを（ハルヒのはすでにあるからな）部室に設置し、無線ＬＡＮ設定とかなんとかゲームのインストールとかなんとか全部やってくれたあと、ハルヒは高らかに叫んだ。

「その前に軍隊の割り当てだろ」

「うーん、あみだでいいじゃない。なんか面倒くさいし」

あみだくじの結果、俺とハルヒが陸軍、海軍が長門と朝比奈さん、空軍がキョン子と古泉に決定した。特に感想は無し。

「さあ、早速練習しましょう！絶対勝つのよ！」

そうやって意気込み、ＣＰＵと対戦を始めたものの・・・

「・・・案外難しいな、これ」

キョン子がしかめっ面で言う。ゲーム構造は単純だが、単純だからこそ難しい。ＣＰＵの動きを見ると六ユニット全てが連携していて、俺なんかは逃げているうちにいつのまにか陸の端っこに来てし

まい、陸から戦車、海から戦艦の挟撃を受けあっさり散った。

「うううう～どうすればいいんですかぁ～？？？」

朝比奈さんは自分がどこにいるのかもわからず、戦闘機の爆撃を受け続けていた。

ちなみに自分の画面には全体のマップは表示されない。自分のユニットの周りと、仲間がどこにいるかということだけだ。だから敵の接近は本当に自分の近くに来てからでないと分からないという仕組みになっている。だからこそ仲間との連携が必要なのだが。

自分のユニットは一応ひとかたまりになっているが、分散させて行動もできる。俺は一度試してみたが、一つのユニットに集中しているといつの間にかもう片方がやられており、そうなれば俺のユニットの戦力は一気に半分になってしまうことになるので、砲撃なども半分の威力しか出なかった。

「マニアックですね」

古泉の感想だ。

何回かＣＰＵ対戦をしたものの、結局一勝もできずに下校時間になった。六人でぞろぞろと帰路につく。

「まあまだ本番まで一週間もあるし、全然余裕だわ！ねっ！みくるちゃん！」

何を根拠に余裕なのか原稿用紙三枚以内で説明してもらいたいも

のだ。

俺は古泉に並んで歩いた。

「まあ、今回は無理だろうな」

今回も、というべきか。バスケも長門のインチキが入ったからな。

「するとどうします？また長門さんに頼りますか」

「いや、今回はなしだ」

古泉は少し驚いたリアクションを取り、尋ねた。

「負けるとまた閉鎖空間が発生する恐れがありますよ？それでもですか？」

「あいつももう少しは分かってもいいんだ」

ま、今回の件は奴が持ち込んだものでもないし、失うものはもともと持っていなかったものだ。なくてもかまやしねーな。

古泉がいやに含み笑いをする。なんだそれは。悪夢に出てきそうだから今すぐ止めろ。

「いえ、羨ましくなったものですから。あなたと涼宮さんは、形に出さないこそすれ、素晴らしい信頼関係で結ばれているのですね」

「どういう意味だよ」

「あなたはゲームに負けたとしても涼宮さんが閉鎖空間を生み出さないと信じている。また、涼宮さんはあなたが必ず勝利をもたらすと信じているのです。これを信頼関係と言わずしてなにを？」

・・・とりあえず、古泉の隣でキョン子がにやにやしているのに腹を立てておこう。

十六話　天秤座の日

さて、約束の一週間後の放課後になった。わたしたちは部室に集まり、それぞれのノートパソコンを立ち上げた。

もうすでにコンピ研の連中が待ち構えており、わたしたちはコンピ研のグループに参加した。

いよいよ対戦の始まりだ。ちなみにわたしたちがこの一週間ＣＰＵとの戦績は一勝十一敗四分けである。意外にも数字にしてみるとわりかしやったほうだろうか。

『ルペルカリア』とやけにこった名前の戦闘機がわたしの軍を攻撃してきた。とっさに左に進路を変更する。

「ん！？」

しかし見計らったかのように正確な対空砲が、敵戦車『ブラインドネス』から放たれ、わたしの戦闘機軍の数が少し減った。なるほど自信があるわけである。巧みな連係プレーだ。

わたしは『ルペル・・・』面倒くさい、敵戦闘機Ａを狙い落そうと思ったが、既にわたしの索敵範囲を超えた所に移動済みであった。顔をしかめる。

ちゅどーん、ばこーんと安っぽい爆発音がキョンのパソコンから鳴った。どうやらキョンの戦車が地雷を踏んだみたいだ。

「いつのまにこんなところにまで・・・」

少し驚いたようにキョンが言った。

「なにやってるのよ！いきなりやられちゃってるじゃない！」

ハルヒが喚く。

「うるせー。これでも頑張ってる方なんだ」

「まったく、あんたって・・・あれっ！？」

ハルヒのパソコンからも爆発音が鳴った。地雷の第二の犠牲者だ。

「おかしいわね・・・いつのまにこんなところに・・・」

索敵ぐらいしろっての。わたしも言えた立場じゃないけど。

コンピ研の作戦は一撃離脱法が主のようだ。戦闘機が急襲してきたから応戦しようとすると、海か陸からすかさず援護射撃が入る。うーむ。じわじわと戦力が削られつつある。

しかもわたしの軍「戦闘機」は攻撃力は一番高いようだが、防御が弱いし、しかもすべてのエリアから狙われてしまう、ハイコストなユニットであった。

それでも・・・なかなか楽しいじゃないか、とわたしは思ってきた。まあ全く攻撃は当たらないんだけれど。こんな大人数でゲームをするなんて初めてだ。

「ああ、僕のはもうそろそろ限界のようです」

中身なしの笑顔を浮かべて、古泉が申告する。古泉、やっぱりゲーム下手だな。古泉の戦闘機の戦力が残り二けたを切っていた。

「仕方ないわね・・最後の手段よ、古泉君。その名も特攻よ！」

第二次世界大戦中の大●●帝国の将校並に最低な将軍だ。そこ、笑うところじゃないって。

「了解いたしました、将軍。この命、将軍に捧げその上で朽ち果てる所存です」

馬鹿か、古泉。そう簡単に了解するなよ。

「古泉一樹、行きます・・・！」

古泉軍が最後の力を振り絞って敵戦闘機Ａに体当たりを敢行した。意外性抜群のその行動は、敵戦闘機Ａの冷静さを奪ってしまったようで、もしＡが冷静に判断を下していれば古泉軍は体当たりの前に全滅していただろう。

古泉軍はそのまま爆発炎上し、敵戦闘機Ａもろとも散ってしまった。さらば、古泉男版。一姫に比べればあんたはキャラ薄かったみたいだけど気にせずこれからもがんばってください。

「僕は励まされているんですか？」

古泉が肩をすくめて見せる。

「けなされてるのさ」

キョンが口をはさむ。ハルヒは、「これで五対五ね・・・まだまだこれからよ！」なんて馬鹿なことをつぶやいていた。

次の瞬間、戦艦が全艦撃破された音が朝比奈先輩のパソコンから聞こえた。

「ふええ、あれ？おわっちゃったんですかぁ？」

「・・・・・・・・・・」

「・・・ひぃ！？すすす涼宮さん怒らないで・・・・」

朝比奈さんはとうとう最後までユニットの動かし方が分からなかったようだ。

キョンは常に突出気味のハルヒ戦車をかばいながら陸を右往左往していた。

ハルヒはそんなことおかまいなしにずんずんと敵陣営へと突き進んでいく。

長門は確か朝比奈さんと同じで戦艦だったけど・・・・あれ。

長門戦艦の様子がおかしい。なぜか通常の十分の一ぐらいのサイズしかなかった。

そして長門の様子もおかしかった。さっきからガガガガと妙な音

が聞こえると思ったら、どうやらその正体は長門の神速タイピングのようだ。

「・・・指が早すぎて二十本ぐらいあるように見える・・・」

わたしは思わずつぶやいていた。キョンが立ち上がり、長門の近くに行った。

「おい長門、今度はインチキなしっつったろ」

「インチキと呼ばれる行為は行っていない。全てプログラム内での事。人間が行うことのできるレベル」

しかし長門のパソコンに表示されているのは普通のゲームの画面ではなく、真っ黒な背景に白い文字がばあーっと連なっている意味不明な画面であった。

「そ、そうなのか・・・？」

まあ、長門は嘘は言わないだろうな。

「・・・インチキと呼ばれる行為をしているのは、あちらの方」

「なに！？」

「コンピュータ研究部は兵器『地雷』の設置のプロセスを省略している。つまり、ユニット『兵』を使用することなく地雷を設置することが彼らには可能」

「だっからおかしなところに地雷が置いてあったわけねっ！」

ハルヒが目を吊り上げて怒り出した。

「また、戦艦の装備『魚雷』は自動追尾モードに設定されている。９４％の確率で目標への到達が可能」

なんて奴らだ！どうりであんなに自信満々だったわけだ。

「・・・で、お前は今何をやってる？」

「改造されたプログラムの初期化と変更プログラミング。課せられたルールは遵守している。許可を」

長門はまっすぐにキョンを見つめた。キョンがたじ、となったのが見て取れた。

長門・・・ひょっとして、負けたくないのか？

わたしが前々から思っていたことがある。それは、長門にも感情が芽生え始めているのではないか、ということ。

エンドレスエイトの時の、退屈そうに見えた長門。とか。

そんなにわかの妄想が、ぐっと現実味を帯びてきた。

ためらうキョンに、わたしは声をかける。

「いいじゃん、インチキしてんのはあっちだって。目には目を、インチキにはインチキを、だって」

敗北した古泉もにこやかに同意する。

「現代の人間の力の範囲内での行動なら、問題ないと思われますが」

キョンはそれでも迷っていたが、やおら笑みをこぼすと、長門に宣告した。

「やっちまえ、長門」

長門のその真っ黒で無機質みたいな瞳が一瞬揺らぎ、長門はつぶやいた。

「そう」

その後。

「負けだよ・・僕たちの完全な敗北だ・・・いや、まさかこれほどとは・・・」

ゲームはその後の長門の大活躍で、ＳＯＳ団の勝利となった。その十分後ぐらい、部長氏がうなだれながら部員を引き連れやってきた。

「まさかゲーム中にプログラムを書き換えられるとは・・・」

ハルヒはハルヒで部長氏の言うことなんざ聞いちゃいなかった。

「これでこのノートパソコンは全部あたしたちのものね！それに

敗者は勝者に従うものよ、コンピ研をＳＯＳ団第一支部にするわっ！なんでも言うこと聞いてもらうからねっ！それに・・・」

まあハルヒの言葉も死にかけの部長氏の耳を通り抜けて行ってるんだけど。

「・・・・・・なあ、君。書き換えをやったのはいったい・・・いや、だれだか大体想像はつくんだが・・・」

そう言いつつ部長氏はパイプ椅子に座る長門を注視した。

ええ、まあご想像の通りですよ。

「君、暇な時でいいんだ・・・コンピ研の部活に・・・参加してみないかっ！？」

部長氏の言葉がにわかに活気づいてくる（ハルヒの喚き声は無視だ）。長門は黙ってキョンを見つめている。キョンは困惑してわたしを見る。

（なんで長門は俺を見てる？）　（あんたが決めてってことだろ）

（なんで俺？）　（知らん）

キョンは少し緊張した様子で咳払いすると、言った。

「好きにしろ、長門。お前だってやりたいことがあるはずだ」

長門はキョンの言葉を聞いて、わずかに首をかしげる。

「そう・・・」

それはまるで、相変わらず何の感情もないような。

「・・・たまになら」

でも、長門は確かに変化しつつある、と思うのはわたしだけだろうか。

家に帰って、なんだかゲームがしたくなって、わたしはキョンの格ゲー百人抜きに挑んだ。今やっとあと二人を残すところになった。

「なあ、思うことがあるんだが」

「なに？」

わたしは画面をにらみつけながら返事をする。よし！あと一人！

わたしの操るインドの曲芸師の必殺技を百人目に一気に叩き込む。なんだかとても調子が良くて、敵の攻撃を全て見切ることができた。そのまま相手にダメージを与え続け、百人目はとうとうぶっ倒れた。おお、やった。

「撮って撮って」

記念記念。わたしはキョンに携帯を渡し、Ｋ・Ｏの画面の横で笑顔を作った。

パシャ。

「それで？思うことって？」

キョンは至極真面目な思案顔を作り、言った。

「お前・・・格ゲーなら勝てるんじゃないか？長門にさ」

・・・・今度、機会があったら（機会があるのか怪しいが）、長門とやってみるかな。

十七話　十二月のストーブとどうでもいいような体育のサッカー

残暑長引きすぎだ、と文句を言っているのが雲の上の誰かに聞こえたのか、十二月に入ると急に冷え込んだ。迷惑極まりない話である。

特に朝の部屋の冷え込みようと言ったらない。カーペットもほぼ意味をなさない。ぜひ床暖房に改築すべきだとまあ俺も散々愚痴っていたしな、これぐらいのことは見逃しておいてやらなくてもなくなくないだろう。

何の話なのか分からないって？ヒントは布団とベッドの交代制だ。まだ分からない？第二ヒントはキョン子だ。・・・・分かるか？

第三ヒントは、キョン子が俺のベッドに潜り込んでいる、ということだ。

「・・・・・・・・・・・・・・」

目を開けたキョン子が、とろんとした目のまま、俺をいきなりベッドの下へと蹴り落とした。

「ってえなっ！ってか寒い！」

「自分に夜這いとか・・・それは・・ないと思うな・・・」

「夜這・・・ってお前が潜り込んできたんだっっっっ寒い」

昨日は俺がベッドの日だったはずだ。猫かお前は全く。そしてその軽蔑するような目を今すぐやめろ。被害者は俺だ。

「あれ・・・？そうだっけか・・・眠い・・・睡眠薬・・だ・・」

まだ夢を見ているのかお前は？誰が睡眠薬だ。俺はお前のお蔭ですっかり目が覚めたぜ。・・・・・・・・こいつ二度寝しやがった。もう知らん。

俺はキョン子を絶対に起こさないようにそろりそろりと支度を始めた。

「・・・ふーん、じゃあキョン子さんは今頃大慌てかもね」

学校の下駄箱で会った国木田にこのことを話すと、国木田はのんびりと言った。

「ああ。最終目覚まし兵器の妹も今日は歩行会とかなんとかで早く出たからな、あいつを起こすものはもういないのさ」

「でもキョン」

「なんだ」

「キョン子さんってキョンの部屋で生活してるの？」

・・・・・・しまった。

「そんなわけがないだろう何を言っているんだ国木田よそんな戯

言をほざくなんて国木田らしくないぞさては頭が風邪でも引いたのか」

息継ぎせずに言いきった。

「ああ、実はそうなんだ、このところのどの調子が悪くて。頭はまだ痛くないんだけどね」

「・・・あ、そうなのか。まあ季節の変わり目だしな」

うまい具合に話題を変えることができて俺はほっとした。しかし・・・うっかりとしていた。どうやら俺の中では非日常がいつの間にか日常を侵食しつつあるようだ。

チャイムが鳴ったのでざわざわとしていた周りも席に着き、俺はのろのろと数学の教科書とノートを取り出した。

ちなみに、キョン子は一限目の途中で現れた。俺を睨みつけながら。

教室に暖房があれば俺ももっと意欲的に学習に取り組めるだろうななどと到底実現できなさそうな妄想をしていると、いつの間にか四限目であった。

四限目は体育で、しかも男子は外でサッカーだった。

「この時期にサッカーなんて、カリキュラムに深刻な問題があると思うね」

隣でのんびりと構えて、味方のフォワードたちの攻撃を眺めている谷口に俺はぼやいた。

「ふふ、そうだな・・・ぐふふふ」

「なんだその気味の悪い含み笑いは。そんなにサッカーが好きだったのか」

谷口はあからさまに上機嫌だった。顔が常ににやけている。どうしたものか気持ち悪い。

「いやあ、よくぞ聞いてくれたなキョンよ！」

別に聞いちゃないがね。

「文化祭の時の俺の宣誓を覚えているか、キョンよ」

あ？ああ、クリスマスまでに絶対に彼女を見つける・・なんて言ってたな。

「そうっ！俺はあの時の目標を見事達成したのであった！」

嘘だ。

「はっはー！嘘じゃないんだなこれが！いやー、俺はもーお前側の人間じゃなくなっちまった！置いてって悪いなーキョンっ！いやーほんとすまねえー！」

「・・・・相手は誰だ」

「光陽園学院のお嬢さんだぜっ！清楚系だ、いいだろ？」

光陽園学院っていったらあの駅前の女子高か。

「さあて、クリスマスはどっこに行こうかなぁ～」

浮かれて頭がぴよぴよになっている谷口の顔面に、ちょうど相手が放った超絶アーリークロスが直撃、

・・・・すれば良かったのに。

まあ、そううまくはいかないもんだ。な。

さて、まあ放課後。

「クリスマスを目いっぱい楽しむのよ！」

というハルヒの号令で俺や古泉は部室をクリスマスバージョンに飾り付けていた。朝比奈さんはちなみにサンタになっている。このサンタ衣装、ハルヒのクリスマスプレゼントらしいが、なかなかどうして奴も良いものを持ってくる。とほめたくなるほど、朝比奈サンタはよく似合っていた。・・・何でも似合うんだな、朝比奈さんは。

「今年はうっかりしてたけど、来年は釈迦とマホメットの誕生日も祝ってやらなくちゃね。キリストだけじゃ不公平だわ」

我らが団長は団長席に座ってそんなことをほざく。

キョン子はストーブの前で猫はこたつで丸くなるの図を人間なりに忠実に再現していた・・・ウソだろ、寝てやがる。

「やっぱ鍋かしら・・ね、何がいい？」

「何の話かさっぱりだ」

「クリスマスパーティーのご馳走に決まってるじゃない」

まあなんでもいいが。鍋でも別にいいんじゃないか。闇鍋とかは禁止でな。

古泉が振り返る。

「では、僕がどこかの店に予約しておきましょうか？」

ハルヒは首を横に振った。

「ううん、もちろんここでやるわよ、あたしが作るんだからっ！」

火気厳禁だろ、ここは。

「ばれなきゃ大丈夫。こういうのは、隠れながらやるのが楽しいんだから」

万一見つかっても鍋を食わせりゃおとなしくなるに違いないとハルヒは力説した。こいつが言うんだから本当にそうなりそうな気がするぜ。

てなわけで、今年のクリスマスはＳＯＳ団でハルヒの手製鍋を喰らうことになった。別に谷口のことはうらやましくない。

「具材は何がいいかしらね・・今のうちに考えておかないと」

「おや、雨が降ってきそうですね」

「・・・・・・・・・・・・・・・そう」

「あの～・・サンタさんはお茶入れると思いますか・・・？」

「眠い・・・寒い。。。キョン、炬燵出そう」

まあこんな具合で、俺は俺らしいクリスマスを迎える。

――――――はずだった。

十七話　十二月のストーブとどうでもいいような体育のサッカー（後書き）

消失編突入ですーーーー

十八話　エニー・クルー・ウェア・シー・ディサピア？（前書き）

大変長らくお待たせいたしました。消失編始まります。

十八話　エニー・クルー・ウェア・シー・ディサピア？

・・・・・文芸部の部室のドアを恐る恐る開ける。

・・・いてくれたか・・・。

パイプ椅子に座って本を読んでいた男子生徒が立ち上がる。眼鏡をかけているようだ。

教えてくれ。お前は俺を知っているか？

「鏡の向こう側の君なら」

違う、俺が聞きたいのは――

「メール」

風もないのに男子生徒の薄紫の髪が揺れる。

「メールを思い出して」

お前は一体、何を言っているんだ――

世界が暗転し、本能的にがばっと起き上がった。

「！？」

見慣れた俺の部屋だ。間違いない。

「夢か・・・」

意味不明な夢を見ていた・・・のかどうなのかさえ分からない。

携帯を開いてぼんやり時刻を確認する・・・。

「まずい遅刻だっ！」

一気に目が覚め、俺は制服を慌てて引っ掴んだ。キョン子がいない。昨日の仕返しに違いない！やられた・・・！

朝飯も食べている暇もないぐらい、時間はやばかった。俺は食卓に置いてあった弁当の入った巾着をひっつかむと、家を飛び出した。

間に合ったのが奇跡だ。

「間に合ったのが奇跡だ」

声に出してもう一度。国木田が寄ってくる。

「ぎりぎりだねー、キョン。妹さんに起こしてもらえなかったの？」

きっとキョン子の仕業だ。しかしなんだ、奴がいないぞ。

「奴ってだれ？」

「え、そりゃ・・・・」

途中まで言いかけて俺は絶句した。なんとハルヒまでも学校に来ていなかったからだった。風邪か？んな馬鹿な。またなにか企んでるんじゃないだろうな。

始業のベルが鳴った。国木田は自分の席に帰り、俺は毎度おなじみの席に座る。誰かさんがいないからなのか、妙に背中がすーすーするぜ。それにしてもキョン子はどこに行きやがった？早く席に着け、恨み節をえんえんと聞かせてやるから。

しかし。

「！？」

俺の隣のキョン子の席に、別の女子生徒が座った。

「・・・・な、なあ、お前、席間違えてないか？」

その女子生徒は不思議そうに俺を見つめ、首を横に振った。

「一体いつの間に席替えしたんだ？」

「？席替えなんてしてないけど。春にしたきりじゃない」

女子生徒は少し呆れたように俺に言った。

「・・・・は？」

じゃあキョン子はどこに行った？

教室を見渡す。生徒はすでに全員が着席しており、教師の到着を待つばかりとなっていた。

「・・・・！」

真っ先に俺の頭に浮かんだのは、「キョン子は自分の世界に帰ったのか？」ということだった。

あいつの存在そのものが消失している。

やはり帰ったのだろうか？いや、それしか考えられない。

だけどなぜ、急に・・・？

教師が来て数学の授業が始まる。

しかしまあ、良かったんじゃないか。とにかく帰ることができて。俺はそう結論付けた。あいつが帰ることができたんだから、あいつの世界の凍結も解除されたに違いない。これにて一件落着、だ。

唐突ではあったがな。後で長門にでもくわしく聞いてみるか。

昼休みになった。ハルヒはどうやらマジで欠席のようだ。

「お休みみたいだから、ここ、座ってもいいよね」

国木田が弁当を持ってハルヒの席に腰掛けた。俺も飯としよう。

そういえば。

「国木田、お前風邪治ったみたいだな」

昨日のどの調子が悪いとかなんとか言ってたよな。

国木田はきょとんとする。

「え？のど？ううん、僕は風邪ひいてないよ？」

は？お前昨日は調子よくなかっただろ？

国木田は怪訝な顔をした。

「そんなこと言った覚えはないけどなぁ・・・第一風邪もひいてないしね」

？？？俺の頭上に盛大な？マークが出現した。ように思った。

「よーう・・・」

陰鬱な声がしたと思ったら、谷口であった。顔色も悪くマスクをつけて、こいつの方が風邪っぽい。

「やあ谷口。まだ風邪、治らないの？」

まだ？だと？

谷口は俺の隣の席（昨日までキョン子の席だった）に座ると、机をがたがた引きずってこちらに持ってきた。

「治んねーよ・・・・・熱も上がる一方だ・・・でも親父は四十度超えるまでごほごほ・・・休むなってよ・・」

「それは大変だねー。同情するよ、谷口」

「ちょっと待て。谷口、お前昨日はすっげー元気だったよな？」

俺に彼女自慢を散々したじゃねーか。

「はあ？なに言ってやがる。ここ一週間ぐらい、俺は風邪ひきっぱなしだ・・・・・・それに彼女なんて・・・できて・・げほごほ・・・ねーよ」

なんだと？国木田がますます怪訝な顔をして俺を見た。

「キョン、どうしたんだよ一体？さっきから僕が風邪ひいただの谷口は元気だのさ。夢でも見てたの？」

・・・・これはどういうことだ。話がかみ合わない。なんだか雲行きが怪しいぞ。もやもやする。今度は一体何が起きてるっていうんだ？

その時――――廊下側にいた女子の小さな歓声が聞こえた。一人の女子生徒がドアを開けて入ってくる。重役出勤してきたそいつは、コートを脱ぎながら友人たちの質問に笑顔で答えている。

「うん、もう大丈夫。午前中に病院で点滴打ってもらったら、すぐによくなったわ。家にいても暇だから、午後の授業だけでも受けようと思って」

そいつは――長い黒髪を揺らしながら、ゆっくりとこちらに歩いてきた。

俺は唖然としてそいつの足取りを注視した。

「あ、どかないと」

国木田がそいつの姿を確認していそいそと弁当を片付け始めた。

「あ、いいの。お昼食べてきたし。机に鞄掛けるだけだから」

そいつは国木田に向かって物腰柔らかく微笑んだ。

「そう？じゃあ、お言葉に甘えて」

国木田は座りなおした。そいつは鞄を机に掛けると、俺の視線に気づいたのか、俺の方を向いた。首をかしげる。

「どうしたの？――――キョンくん？」

――――そんな、バカな。

そいつは俺もよく知っている――――

十八話　エニー・クルー・ウェア・シー・ディサピア？（後書き）

不定期で本当にすみませんｏｒｚ

どうか見捨てないでやってください。

十九話　知っているようで　知っていたはずなのに（前書き）

十九話　知っているようで　知っていたはずなのに

そいつは涼宮ハルヒ、その人だった。

「どうしたの？キョンくん？」

ハルヒは長いストレートの髪を何気なくつまみながら、俺に不思議そうな顔をして見せた。

「・・っ！」

なんだ、なんなんだ、誰だこいつは――――。

「ハルヒ・・・お前、本当にハルヒか」

かすれた声しか出なかった。ハルヒは少し驚いたように目を見開き、

「どういう意味・・・？それよりキョンくん、わたしのこと・・・ハルヒって呼んでいたっけ」

と言った。谷口ががばっと俺の肩を掴んだ。

「お前、いつから涼宮さんを呼び捨てで呼ぶようになったんだよ？」

は？涼宮さんだと？

「本当だよ。いつのまにそんなに仲良くなったんだい？」

谷口と国木田の声が恨めし気に聞こえるのは・・・何故だ。

「う、ううん、いいの。むしろ・・・・・・え、あ、じゃ、じゃあわたし行くから・・・」

ハルヒが頬を少し紅潮させ、動揺している。ハルヒが動揺している？

おい――――――これは、いったいどういうことなんだよ。

このパターンは流石に予想してなかった。ハルヒが別人になっちまった。

意味が分からない。ハルヒは今はクラスの女子と談笑している。この状況だけでも十分おかしい。

ハルヒのおかしいところを全て挙げよう。

一つ目、髪が長い。春に出会ったころ並みの長さだ。

二つ目、俺を「キョンくん」と呼んだ。そんなのまるで――――いや、いい。

三つ目、俺が呼び捨てで呼んだことについて驚いた。

四つ目、谷口や国木田に、いや、おそらくクラス全員から――――慕われている――――ということだ。

・・・考えられる理由としては

一つ目、俺の頭がおかしくなった。

二つ目、世界の方がおかしくなった。

三つ目、これはすべて夢で、俺はまだ夢を見ている。

四つ目、逆に今までのハルヒが夢で、これが現実。

・・・・ここまで考えて、俺の脳はすでにパンクしつつあった。もともとあまり使わないからな。

「どうなってやがる・・・」

俺はたまらず教室を飛び出した。しかし廊下を歩いていた生徒にぶつかってしまう。俺はよろけて、そいつの顔を見た。

相変わらずウザいくらいのイケメン、古泉だった。

そうだ、異変が起きた時のナレーター役はいつだってお前だったじゃないか――――古泉！

俺は期待を込めたまなざしであいつを見たが。

・・・その時の俺の驚愕を理解していただけるだろうか。なんと奴は、俺をにらみつけていた。

「・・・気ぃつけろ」

吐き捨てるように古泉はそう言うと、俺の方なんか見向きもせず歩き出した。

「・・・は？ち、ちょっと待てよ古泉！」

なんだこれは。新たなハルヒの遊びか？悪いがそんなもんに付き合ってられる程――

「なんなんだよ、てめえは。邪魔なんだよ」

古泉の眉間に見たこともないようなしわが寄るのを俺は確かに目撃した。しかも、制服に注目すると、今までの古泉の制服の着こなし方とは百八十度違う――つまり、この上なくだらしなく着ていた。

どん、と古泉に俺は肩をどつかれ、俺はしりもちをついた。

古泉は――いや、あいつは古泉なんかじゃない、人違いだ。そっくりさんだ。ドッペルゲンガーだ。

しかし、頭のどこかで俺は正しく理解していた。あれは間違いなく古泉一樹そのものである――。

「古泉！」

背を向けて歩き出していた古泉は煩わしそうに振り返った。

「き、機関という言葉に聞き覚えは？」

「は？なんだよそれ？つーかさっきからなんなんだお前。馴れ馴れしいんだよ」

馴れ馴れしいのは、お前の・・・役目、だっただろ・・・・・・。

「おい古泉、なにしてんだ」

柄の悪い男子生徒に呼ばれ、古泉は歩み去った。俺に混乱を残して。

「キョン、古泉君と話していたの？あの人となにか接点でもあったの？」

教室から国木田が顔を出す。

「あの人、中学でもいろいろやばかったんだって。悪いやつらとの付き合いもあるらしいから、気を付けた方がいいよ。だけどどうして北高に入れたんだろう・・・・？親のコネっていう噂もあるけど」

古泉が、問題児・・・・。笑えない、冗談だ。

俺の世界が歪み始めていた。

十九話　知っているようで　知っていたはずなのに（後書き）

とうとう原作の内容を大幅に変え始めました僕を許してくだせぇ。

そしてとうとうテスト期間なるものが襲い掛かってきました。

しばらくお休みです・・・・・・・・・・・・

二十話　歪む　歪む

ハルヒが優等生になっちまった。

古泉がグレちまった。

となると・・・朝比奈さんと・・・長門は・・・どうなっているのだろう？

嫌な予感しかしないぜ。

授業が終わるのをただただ望んでいた俺は、授業終了のチャイムと同時にすぐさま教室を飛び出した。朝比奈さんはどこに――――二年生棟か――？

二年生棟へと続く階段を二段飛ばしで駆けあがる。しかし二年生棟に行くまでもなく、俺は望みの人と踊り場で鉢合わせした。

朝比奈さん！

良かった・・・朝比奈さんは見た目ではどこにも変化は見られ・・・いや。

「朝比奈さん！！」

俺の目の前を通り過ぎようとしていた朝比奈さんの手を思わず取ってしまう。朝比奈さんがくるりと振り返る。

「あ、朝比奈・・・さん？」

「・・・だれ？何処かで会ったっけ？」

目の前の朝比奈さんは微笑さえ浮かべているものの、「知らない人から話しかけられました」という顔そのままである。冷たい汗が俺の背筋を伝う。

「朝比奈さん・・朝比奈さんですよね？俺の知っている未来からやってきた朝比奈さんですよね！？」

朝比奈さんは可愛らしく・・いや、なんだかこの朝比奈さんは・・・

パンツが見えそうなほどのぎっりぎりのスカート、ムチムチの太ももを覆う黒いスパッツ。シャツのボタンを二つ三つ開けたそこから覗くはちきれんばかりの胸の谷間、そして何より、妖艶な雰囲気の化粧をそのきれいなお顔に施しておられる。

なんだかこの朝比奈さんは・・・・・・エロい。

天使系美少女だった朝比奈さんは・・そう、小悪魔系美少女と化していた。

俺が見たこともないような魅惑の目つきをして、朝比奈さんは顔を近づけてくる。

「未来？なんのこと？あ、もしかして、わたしのファンクラブに入りたいのかしら？でも待ってね。物事っていうものには順序があるのよ？」

「ファ、ファンクラブ？いえ、そうじゃなくて・・・」

たじろきつつ俺は、朝比奈さんの変貌ぶりに目を奪われたままだった。

「よく見たらあなた、結構私好みの顔ね。・・・ふーん、いいわ、加入を認めてあげる」

朝比奈さんが目の前で超巨大惑星破壊砲にも勝る威力のウィンクを炸裂させたものだから、俺の脳味噌はもう一瞬で沸騰してしまった。冷えたり沸騰したり俺も大変だな。

なんということだ、この朝比奈さんは自分が持つ力を最大限に引き出す方法を全て理解している。

そこで我らがあの方が現れなければ、俺の理性はとうに吹っ飛んでいたかもしれない。

「つ、鶴屋さん！」

けらけらと笑いながら、鶴屋さんがやってきた。

「え？どこかで会ったかにょろ？それとも？調査済みってやつかいっ？」

・・・・そんな、あなたもですか。鶴屋さん。

「みくるぅ、その辺にしとかないとその子死んじゃうよっ！」

「うふっ、そうね。じゃあね、・・えーと、新入生君♪」

朝比奈さんが弾むように鶴屋さんと俺の横を歩み去った。

・・・・・・。

狐につままれたようだ。

見たかよあの太もも。じゃなくて！朝比奈さんも鶴屋さんも俺との面識なんざ全くないという顔をしていた。これは・・・ショックだ。

そして朝比奈さんに至っては、人格が変わっていた。

嫌な予感。

ＳＯＳ団が・・・・壊れていく。

朝比奈さんのショックから立ち直れないまま、俺は最後の頼みの綱であり沙絶対最終防衛ラインである長門に会いに行くことにした。こうなったらもう・・・・・いや。

絶体絶命である。長門だけが唯一の命綱だ。あいつも・・ハルヒたちのように人格が変わっていたとしたら、もう本当にお手上げだ。

文芸部部室の前に立つ。ドアノブに手をかけるものの、長門がいなかったらと思うと恐ろしくてなかなか押し開ける勇気が出ない。

「・・・頼むぜ・・・・・」

俺は思い切ってドアを開けた――――――

「いてくれたか・・・・」

俺はほっとしてその場に座り込みそうになった。長門は確かに文芸部部室にいて、おなじみのパイプ椅子に座って本を読んでいる！

・・・・・・・・・・・が。

「・・・・・あなたは・・・・・・・・・・？・・・・・・・・・」

やめろ。

そんな顔をしないでくれ。

長門はそんな表情なんて知らない。

長門が驚くことなんてあっちゃいけない。

なのに――――俺の目の前にいる長門は、その小さい顔に一杯驚きをにじませて、俺の顔を見ていた。最初の頃のように、眼鏡もかけている。

なんてこった。

「お前も別人だっていうのか」

「・・・なに・・・？」

俺はもう無我夢中で、戸惑う長門に詰め寄った。

「なあ、答えてくれよ。お前は情報統合思念体から使わされたヒューマノイド・・・・なんだっけ、とにかくなんでもできるスーパー宇宙人だよな？」

長門はそんな俺におびえたように後ずさった。

「どんな状況でも俺たちを救ってくれていた長門だよな？そうだよな？そうだと・・・・・・言って、くれ・・・よ・・・・・」

今度こそ俺は力が抜け、その場にへたり込んでしまった。頭をかきむしる。

長門はそんな俺を、あっけにとられた様子でじっと見つめる。

「いや・・・すまない。取り乱した・・・・危害を加えようとは・・・これっぽっちも・・・・・・・」

あまりの事態に、俺の脳味噌が全くついていっていない。俺は自分がいかに無力であったか痛感した。

俺は、あいつらにいつだって助けられていたんだ。

あいつらがいないと、俺は何もできない。

「すまない・・・邪魔したな」

俺はそう言って立ち上がるも、長門はやはり眼鏡越しに俺を遠巻

きに見つめるだけであった。

そして俺は、たしかにＳＯＳ団の部室だったはずの部屋からゆっくりと出た。

今はもう、ただの文芸部の部室だ。

文芸部部室から出たものの、俺は自分がどこに行くべきなのか分からなかった。放課後とは、こんなにも静かでつまらないものだっただろうか。

「もう・・・帰るか」

絶望が俺の心を占めていた。もう家に帰って寝よう。明日になれば元通りかもしれない・・・なんて。

教室にふらふらとおぼつかない足取りで行った。だれもいない教室に、夕焼けがぼんやりと差し込む。俺は自分の席まで行くと、どっかと腰を下ろした。のろのろと帰る支度を始める。

異変が起こったのはその時だった。

誰かが俺を呼んでいる気がする。とうとう幻聴まで聞こえ始めたのかもしれない俺は、ひょっとしたらもう終わりかもな。

《キョン！》

びくっと俺は背筋を伸ばした。今度は幻聴なんかじゃない。確かに聞こえた。誰だ？どこから聞こえる？

《ここだって！気づけ！バカやろう！》

俺はがたっと立ち上がってきょろきょろとあたりを見渡す。教室に残っている者は誰もいない。誰もいない・・・ん？

見間違いか？いや・・・。

夕日の差し込む窓をじっと見つめる。俺の影しか見えない・・・っ！？

「！？」

《やっと気づいたか！このノロマ！》

なんと、窓に映っていたのは他でもない、我が親愛なる・・・キョン子だった。

二十話　歪む　歪む（後書き）

久々です・・・。

二十一話　鏡の中のマリオネット

「お前・・・戻れたのか」

《まあね。朝起きたら突然、だ》

「まじかよ」

窓に映るキョン子は少し照れくさそうににやっと笑った。

《まじだ》

散々に打ちのめされてからのお前の出現に、感激して涙が出そうだぜ。全く。

「助けてくれよ、キョン子。今俺の世界は大変なことになってるんだ。いや、世界というよりはＳＯＳ団がだな。古泉は超能力者をドロップアウトしてワルくなってるし、朝比奈さんは未来人の要素のかけらもない妖艶な小悪魔美少女に変貌してる。最強の宇宙人だった長門はいたいけな文学少女になって、一番やばいのはハルヒが全然普通になっちまったってことだ。分かるか？おい？あのハルヒがだ」

《まあまあまあ落ち着けキョン。まず深呼吸をするんだ。それから軽く頭を振って周りを見渡すといい。自分が誰でなぜここにいるか把握できている？できてるならあんたはたぶん、正常だ》

あいつはたぶん、相当面白がっている。俺は溜息をついて、しかし世界は自分を見捨てなかったのだという安堵感に包まれながら、もう一度最初からキョン子に説明し始めた。

《・・・まじかよ》

「まじだ」

事の次第を理解したキョン子の顔からは、面白がるような表情は消えていた。

俺は思いついてキョン子に言う。

「なあ、そっちの世界の長門はどこにいる？長門なら分かるかもしれない」

《そ、そうだな、今連れてくる。たぶんまだ奴は部室だ・・・》

キョン子の姿が視界から消える。五分くらい待って、やっぱりさっきのは狂った俺が苦し紛れに生み出した幻覚だったのかと不安になったころ、キョン子が一人の男子生徒共に再び現れた。

《連れてきた。こいつがこっちの世界での長門だ》

・・こいつが長門か。確かに長門に似ている。違うのは背の高さと、顔の輪郭ぐらいだろうか。つまり、十分長門と納得できた。

「教えてくれ、どうしたらいいんだ、俺は」

《・・・・・僕は直接あなたの世界に関与することはできない。だが、文芸部の部室。そこの本棚にある本のしおりが役に立つだろう》

淡々とした口ぶりで、長門（男）は語った。やっぱりこいつは正真正銘、長門の逆転の存在だ。

「しおりだと？それがいったい」

《詳しいことは僕からは教えることはできない。ただ、役に立つのは規定事項》

「・・・・分かった、ありがとよ！」

《・・・・》

《じゃ頑張れよ、相棒。応援してる。それくらいしかわたしにはできないからね》

キョン子の言葉を背に受け、俺は走り出した。

再び文芸部に押し入ったこの奇妙な男を、文学少女の長門は一体どういう心持で迎えたんだろうな。今となっては分からないし、あんまり興味もないね。

パソコンの前に座ってパソコンをいじっていた長門は俺が扉をこじ開けた瞬間飛び上がり、真っ赤な顔でおろおろ狼狽した挙句パソコンを強制シャットアウトする暴挙に出た。

「また邪魔するぜ！何度も悪いが頼むから通報なんてしてくれるな」

俺は真っ先に本棚に駆け寄ると長門（男）が言っていた本を探すべく両手を戦闘態勢に切り替えた・・・が。

しまった、どの本なのか聞くのをすっかり忘れていた。

長門（男）は言い忘れたのか、言えなかったのか。恐らく後者だな。長門に限って。

しかし長門（男）はなにか意味のある本にそのしおりを入れたに違いない・・・・・しおり？

俺の頭に閃くものがあった。長門としおりと言ったら・・・

四月、長門が長門だと知るきっかけになったのが、長門が俺に貸した分厚い本に挟まれていた、花のイラストがプリントされている代物だ。

あの時の本、題名は確か・・・『ハイペリオン』！

「あった！」

『ハイペリオン』はちょうど本棚の真ん中にあった。急いで取出し、ページをぱらぱらめくる。

本の真ん中ほどのページに、確かにしおりは挟まれていた。興奮して震える手でそれを掴むと、ひっくり返した。

『プログラム起動条件・始まりを探せ。最終期限・二日後』

これだ。間違いない。俺はぽかーんとしている長門に向かってこれはお前のものかと目で問うた。彼女は首をふるふると横に振った。

「そうか・・・いや、その方が俺としては都合がいいんだ・・・・いや、こっちの話だ・・・」

よし、よし、よし！

「ありがとな、長門！」

俺は文芸部部室を飛び出そうとして、脚に急ブレーキをかけた。

「長門、言い忘れた」

「・・・・？」

「眼鏡は無い方がいい。俺に眼鏡属性はないんでね」

あっけにとられた長門を尻目にダッシュで教室へと戻ったが、もう夕日は山の向こうに沈んでしまい、キョン子は消えていた。

・・・ありがとうよ、長門（男）・・・！絶望の中で、かすかな希望が芽生えたぜ。

芽生えた・・・ものの、これからどうすればいいのかとんと見当がつかない。

プログラム？始まりを探せ？期限二日後？いったいどういう・・・？

が、とりあえず今日は帰るしかない。そろそろ学校も閉まっちまうしな。

坂道を下りながら、考えた。おそらくこの文（コード？）には、おかしくなっちまった世界を元に戻すだけの効力がある、はずだ。でなけりゃ長門（男）はこんなものよこさない。

今日から二日後（はたして、この『二日後』というのは今日から数えていいものか知れないが）までに、『始まり』を探し出せ。そういうことだろう。

『始まり』ってなんの始まりなんだ？表現がアバウトすぎるぜ、長門（男）。

始まり・・入学式。出会い。四月。終わりの反対。・・・思いつかないぞ。

一難去ってまた一難、だ。

二十一・五話　混乱のピエリオット

「あいつ、大丈夫なのか？」

わたしは首をかしげて長門に話しかけたが、長門は何の反応も見せなかった。

今日の朝、起きたらすでにキョンは部屋におらず、おかしいなと思ったら弟が妹じゃなくなっていて（意味わかる？）、これはひょっとしたらひょっとするぞと思いながら登校すると、国木田や谷口が女に戻っているではないか。

長門に会いに行くとやっぱり男に戻っていて、説明を求めるとただぽつりと

「あなたが戻ってきたため、この世界は解凍された」

と。しかしそれだけで、わたしがわたしの世界に戻ってきたと結論付けるには、十分だった。

別れの言葉の一つや二つぐらい言っても良かったかなと思いついた矢先に、教室の窓の中にアホな顔をしておろおろしているキョンが見えたのだ。さすがにびっくりしたが、急にうれしさがこみあげてきて、思わず呼んでしまった。というのがわたしのここまでのストーリーである。

ちなみにこの世界は六月である。ハルヒコが時間をさかのぼって凍結しちゃったからな。わたしにとっては高校一年生の半年をもう

一度やり直すことになるわけだが、少し妙な心持になっただけだ。

今日はハルヒコがなんとボードゲーム大会の張り紙を意気揚々とＳＯＳ団に持ち込んだ。将棋、チェス、囲碁の三種類のボードゲームのトーナメントらしい。ＳＯＳ団で挑むんだとさ。それにしても「適当に人数集めとけよな」は、ないだろ。

日も暮れ始めた。帰るかな。

「長門、帰ろう」

本に没頭しているかのように見えた長門は、わたしの言葉にすぐさま反応し、帰る支度を始めた。

「あいつ、すごい混乱してたなぁ・・・」

ふと思った言葉がそのまま口から出て、わたしは思わず苦笑する。おかしなことに、さっきからキョンの心配ばかりしている。

「・・・・そう」

「・・・・な、なんか出来ることないのかな、わたしに」

自分の仲間がいなくなってしまった時の、胸にぽっかり空いたような感情は、わたしにも分かる。痛いほど分かる。

「・・・・・・あなたはさっき、応援ぐらいしかできないと言った。その通り」

その通り、と言われてもだな。

長門はきれいな目で眼鏡越しにわたしを見下ろした。

「僕もだ」

「え？」

「僕も、応援しかできない」

そうつぶやいた長門の表情からは、なにも読み取ることはできなかった。

でも———ちょっと悔しいな、とか思ってたりするんだろうか。

二十一・五話　混乱のピエリオット（後書き）

気合い入れます・・・！

二十二話　まだまだ探すつもりですか

結局何のアイディアも浮かばず、朝になってしまった。俺は半ば夢遊病者のように登校したが、朝っぱらから見たくないものを見てしまった。

優等生になったハルヒが、もう来ていたのである。机に化学の教科書とノートを広げている。

「おはよう、キョンくん」

俺は椅子に座るとため息をつく。

「キョンくんはやめろ、頼むから。歯車がうまくかみ合わないような気がして妙だ」

ハルヒは少し焦ったように目を空にうろつかせ、言った。

「ごめんなさい、やっぱり失礼だった？えっと・・でもじゃあなんて呼べばいいのかな。名前で？」

俺は思うように意思が伝わらず、苛ついた。

「そんなこと深く考えるな。キョンでいい」

お前は、俺の許可も得ず呼び捨てにしてたのにさ。

「そう？ならいいんだけど」

そう言ってハルヒは――――今まで俺が見たことのないような柔らかい笑みを浮かべた。

「・・・・・!!」

白状するが、くらっと来た。ハルヒに動揺するなんざハルヒ歴一年弱の俺の恥名折れだ。どうしたことだよ。

それでも俺は理性を振り絞って、敢えて淡々とした口調で言った。

「なあ、本当に遊んでいるわけじゃないんだな？冗談じゃないんだな？カミングアウトする最後のチャンスだぜ」

ハルヒはきょとんとして俺を見た。

「え？冗談？なにが？どうしたの？」

「・・・いや、なんでもないさ・・ハルヒ・・じゃなくて・・」

ふと気が付いたが、俺はこいつのことをハルヒなんて呼べない。

「・・じゃなくて、涼宮・・・・」

俺は思わず両手で頭を抱えてしまった。こいつはガチもんだ。ガチなヤバさだ。

しかし――――ハルヒは、あんな笑い方もできるんだな。滅茶苦茶もてそうだ。

――――そう思うと、何故だか胸がざわざわした。

そうして一日が始まったのだが、ハルヒを観察するに、奴はクラスの委員長的な役割を担っているようだった。ＨＲなどの場面で、それが明らかになった。

まったく悪夢を見ているかのようだぜ。・・・いや、むしろ今までが悪夢だったのか？

俺が今まで過ごしてきた世界が異常で、この状況が正常なのか？

客観的に考えれば、確かにそうだ。

そして俺はやがて恐ろしい考えにたどり着く。

ハルヒ――――この世界は、お前が望んだものなのか？

授業中、気づかれない程度に後ろを振り返る。

が、ハルヒとばっちり目が合ってしまった。ハルヒが慌てて視線を教科書に落とした。俺もそんな態度を取られるとどうも具合が悪かった。

「・・・なあ、キョンよ、お前は涼宮さん狙いなのか？」

昼食時、俺は国木田と谷口とで弁当をつついていた。

「悪いことは言わん、やめとけ」

知るか。何をやめろって言うんだ。

「やっぱり競争率が高いから？」

国木田が口をはさむ。谷口は大げさに手を振る。

「いーやそうじゃない。むしろ競争率はほぼゼロだな。競争率は問題ないんだが・・・・まずあんな完璧なお方と釣り合う奴なんているか？東中にはいなかったがな。皆諦めるのさ。俺じゃとても器じゃねえってな」

お前、四月の時と言ってることがまるで逆だぜ。

「ふーん、完璧すぎるのも考え物かぁ」

国木田がどうでもいいような感想を漏らした。

あんな完璧なお方と釣り合う、だと？ふざけろ。

さて、あっという間に放課後になってしまった。

文芸部部室にもはや惰性のように向かう。他にどうしろって言うんだ。ふて寝でもしてろ、か？

長門は俺が遠慮がちに部室に入って来ても、今度は怖がったりし

なかった。話しかけてくることこそなかったが、本を読みながらちらちらと俺の方へ視線を寄越した。事実、本のページは全く進んでいなかった。

・・・お、眼鏡をかけていない。言ってみるもんだな。

俺はそんな長門を意識しつつも、パイプ椅子に腰かけると窓の外をぼんやりと眺めたり、棚にあったかの有名な江戸川乱歩をぱらぱらめくったりして過ごした。

「・・・これ」

不意に視界に白い紙切れが入り、俺は目を向けると、ほんのりと頬を紅潮させた長門が、その紙の端っこを握りしめているのだと気づいた。

「良かったら」

「入部届」。紙にはそう書いてあった。

二十二話　まだまだ探すつもりですか（後書き）

Ｘｍａｓが近づいてきますね。

二十二・五話　そろそろ見つかる気がします

「なんだか妙な気がするんだ」

わたしは古泉一姫に言う。

「どうしてです？」

「わたしがこっちに帰ってきた途端、あっちではおかしなことになっちゃってる」

一姫は栗色の髪をちょっと触り、にこやかにほほ笑んだ。

「あちらのことはあちらでなんとかするでしょう。それよりこちらの問題を解決すべきなのでは？」

そう、なんとかしなくては。

わたしたちはボードゲーム大会の真っ最中だった。周りは子供ばかりだ。

それもそのはず、参加年齢制限が二十歳以下のちんけな大会だからだ。

今、ハルヒコが将棋で対戦中。

相手はなんと十九歳でプロ入りした凄腕棋士だ。

問題なのは、そんな相手にハルヒコが勝ってしまいそうだということだ。

素人目にはどういう戦局なのかさっぱりだが、周りのやつらが興奮して騒いでいる。

冷や汗がわたしの背筋を伝う。一姫の笑顔も心なしか強張っている。

なんとかしなくては・・・・

「絶対に勝つわけにはいきませんよ、ここは」

一姫がわたしに囁く。

「手遅れになる前に・・仕方ありません、長門くんの力を借りる他ないでしょう」

一姫は立ち上がり、長門の姿を探し始めた。

「もっと初めに気づいていればよかったのですが」

一姫は長門を見つけたのか、人ごみの中へ歩き去った。

「初めに気づいていれば・・・・ねえ」

わたしはまたぼんやりとキョンの世界に思いを馳せるのだった。

二十二・五話　そろそろ見つかる気がします（後書き）

同時投稿二回目です。「＊＊話」と「＊＊・五話」はなるべく同時に投稿したいですね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2286w/

キョンの非日常

2011年12月11日15時52分発行